

“きび”考

2012年(平成24年) 第6号 7月発行

日本先史古代研究会

“きび考” 2012(平成 24)年 第 6 号 目 次

○古代吉備解明への道程	若狭哲六……………2
○古代アジアを論証する (1/2) 24 年度総会基調講演	矢吹壽年……………3
○問題提起「邪馬台国は吉備だった」	前田忠興……………9
○笠岡高島からの便り	藪田徳蔵……………10
○九州説と畿内説の邪馬台国論を考える(2)	中島康之……………13
○連載 考古フアンのじゃれごと ⑤倭族＝安曇族は海人だった	山崎泰二……………17
○大嘗祭の沿革について	井上秀男……………21
○連載 四国八十八ヶ所 巡り 「歩き(ウオーク)遍路の旅」	樋口俊介……………25
○備前西大寺地名考 金山の考察	丸谷憲二……………30
○古事記編纂1300年を思う 出雲路の探訪記	濱手英之……………36
○編集後記	編 者……………37

日本先史古代研究会「設立宣言」

日本列島には、遠く西アジアや中国から、もたらされた「知られざる古代遺跡」が数多く存在している。考古学・歴史学・民俗学的分野を超えての「先史的見知」により、分析・調査・研究を駆使して、日本の歴史を正すことを目的に、賛同者有志一同で「日本先史古代研究会」を設立する。

2009(平成 21)年 5 月 30 日(設立総会にて)

古代吉備解明への道程

日本先史古代研究会 会員 若狭哲六

古代吉備の国には、風土記が残っていません。風土記は713年(和銅)6年元明天皇の詔(みことのり)によって、諸国に命じて郡郷の地名の由来・土地の状況・産物・古伝説等を記して撰進させた地誌である。完本としては出雲風土記のみであり、古代吉備には風土記の存在を知ることは困難である。瀬戸内海を中心とする備前・備中・備後には、全く風土記の存在を知る手掛かりはなさそうである。この三国に住む我々としては、その国の誕生を知ることは非常に困難であることに気が付いたのである。

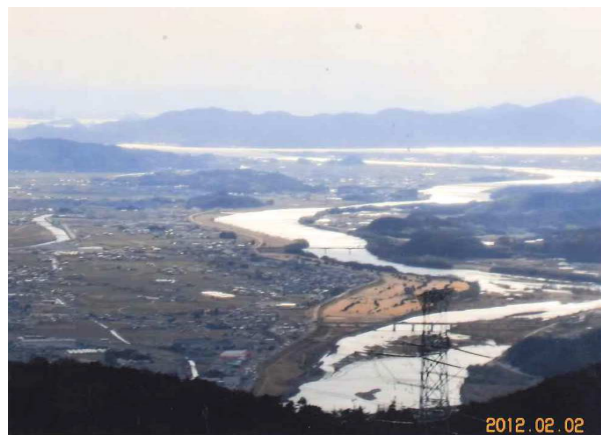
私が古代吉備を知ろうとする機会を得たのは、今から30年前、備前の国(今の岡山県東部)熊山の山頂にある「謎の熊山遺跡」との出逢いに始まったと言えよう。同遺跡との出会いが、古代吉備の国の「謎」を解く鍵を与えられたと感じた。熊山遺跡はこれまでに、識者による詳細にわたる研究はなされていない。私自身、歴史・考古学分野は全くのど素人で、浅学無知な身であるが故、遺跡に身を投じてからは無我夢中に(耳)・(目)・(足)で古代の三備一帯を駆け巡った。

熊山遺跡と取り組み30年間を追跡する中で、研究書も7冊に及んだ。昨年 2011 年 4 月には、熊山遺跡の構築の意義と、南面にある鶴山丸山古墳建立の意義を明らかにし、両遺跡が持つ意義こそ古代吉備解明への第一歩であると考えた。日本の古代史を解く鍵は、古代吉備にあったのではと確信したのである。現在播磨・備前・備中・備後の古代に目を向けて取り組んでいます。

終わりに当たり、日本先史古代研究会会員の益々のご健勝を祈ってやみません。



熊山遺跡 国指定



熊山山頂よりの遠望 吉井川河口部

编者より 筆者(若狭会長)はこの眺めに魅了され30年の研究生活の延長上で、今も思考を重ねています。皆様も同じこの場に立って思いを共有しませんか。

古代アジアを論証する(1/2)

平成 24 年度定期総会 記念講演

平成 24 年 5 月 27 日 (岡山)蓮昌寺にて

日本先史古代研究会会員 矢吹壽年

(一)講演に先立って=自己紹介を兼ねて私と歴史の関わりを話します

矢吹壽年と申します。生まれは1940年、昭和15年で皇紀2600年の年であります。小学校に上がる前昭和 20 年(6/29)の岡山大空襲を覚えています。夜半起こされて縁側に敷き布団を頭から被り(敷き布団は弾を通しにくいとの知識があったようです)兄と二人矢坂山の黒い影の向こうが赤く燃える空に、津島の高射砲陣地からの応射は、時折探照灯に光るB29には届かず、子供心に悔しかったことを覚えています。バリバリと放出される焼夷弾は昔見た花火のようでした。それを口にすると父に「家を焼き出されている人もいるのでそのようなことは言うものではない」と窘(たしな)められました。「もし我が家に降って来たら後ろを見ずに前の田圃に駆け込め」と父に言われました。5歳になる年の事件ですが、以後毎年その頃になると我が家では話題になりましたから良く覚えています。

小学校に上がる前に入学準備でカタ仮名の読み書きが出来ましたが、私たちの入学から教育カリキュラムが変りひら仮名の教育となり、新仮名づかいと新しい漢字での授業となりました。兄弟の読む本は何でも読ましてもらっていましたが旧仮名遣いも順応できました。70の手習いで古文書解説講座に通いましたがここでも有利でした。

今から8年前に不摂生の為、脳内出血を患い半身不随となり左右で体温が異なり、記憶力の減退、意欲の後退、失語症で名詞や形容詞が出てきませんので、吉備中山を守る会、観光ボランティアの皆さんにも奉仕を遠慮していましたが、山崎さんの口説きで一辺恥をかけということで冥土の土産に今日は根性を据えて話します。ということで作って来た原稿を読むことをお許し下さい。

(二)戦前戦後の歴史観

歴史時代も同様ですが特に古代史や考古学は第一次世界大戦後に米英仏露等の大国に肩を並べた大日本帝国と云う大国としての面子(めんつ)、強大な一等国日本と云う国粹主義を基底とした皇国史観に裏打ちされた、今考えると小説風の歴史が、第2次世界大戦の敗戦によって、革新的な新制大学出身の学者による自由民主の思想の基に、西洋哲学の肯定と東洋哲学を否定し、新しく日本の歴史を教育するための社会科の教科書作りと教育カリキュラムが選定されたのであります。これらはGHQの意向に添った自発的選定でありました。

2歳上の兄の教科書は裁断前の一枚ものでした。母はそれをページ毎に切って糸で縫いました。小学校四年生で古墳を学びました。先生が黒板に書いた前方後円墳の姿を見たとき「それは尾上の山の端にある」(車山古墳)と口走ったのですが、先生は車山古墳のことを知らなかったようです。後期の横穴古墳は住居址と教えられ「天井に煤がついとるじゃろ」と説明され、その頃はルンペンが無断宿泊した跡でした。小学2年生の夏休みに隣の小学校で開かれていた郷土の歴史教室に参加していたのです。その時の講師の一人が中仙道の佐藤勲先生で、後に中山中学校へ赴任してきます。佐藤先生は催眠術の出来る人でした。

高校は岡山工業高校で当時東古松に校舎がありました。隣から時折フォルマリンの臭いがします。岡山大学医学部の人類学教室には近藤義郎先生が講師で居りました。同好の同級生と人文地理教師の池上

憲明先生を顧問に考古学研究会を発足し、次の年度からは部活動補助金も頂けるようになりました。部長が近藤先生の所で特別講義を受けて部員に伝え、部員は小林行雄さんの「日本考古学概説」で自習。相互に疑問をたたかわせながら習得していきました。春休み夏休みは北区高松の立田の友人宅を根拠地に分布調査を行い、自宅から米や野菜を持ち寄り、若干の費用を拠出して頑張りました。成果は高校生同志の集いで報告し得意になったものです。蛙ヶ鼻の壺棺墓の発掘を手伝い、堂山古墳発掘の端緒となりましたがその時は卒業していました。

私は卒業と同時に愛知県瀬戸市の会社へ就職しましたが、その時の同僚に足立さんという人が居て、その足立さんの実家の敷地に古い窯跡が有って黄瀬戸の色、形を自分のものとする事が出来ました。当時永仁の壺がニュースになっていました(加藤陶九郎)。約半年で父の病気入院で岡山に帰り、兄の農業を手伝うこととなります。約8反の田圃の世話、2反の藺草の収穫などがあり兄一人では不可能であったからです。その後県内・市内でアルバイトで過ごしましたが、永続する就職を誘ってくれる町内の方が居て農協へ就職しましたが、そこで私が十二指腸潰瘍で手術となり、手術後は以前のような過酷な労働は無理と悟り、町役場を受験、無事採用になりました。この時の課題に「我が郷土」についてのレポートを求められ、私は縄文・弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉と郷土一宮の遺跡・名所・旧跡についてぎっしり書き込みました。そのレポートにより教育委員会に配属され、社会教育として当時流行していた「一宮歩く会」を企画し実施することになり、好評を得ましたが、そのうち道すがら各地の事柄や由緒を説明することになり、自分自身も岩津政右門先生や市川俊介さんの講座へ顔を出し、古代吉備国を語る会へも参加し、話法や話す順序や歴史の考え方などの研究をし、地方史研究協議会編の「地方史研究必携」で「地方史の研究」を独習しました。

当時一宮町へも開発の波が押し寄せて来て遺跡の破壊や土取り等による古墳の破壊が始まり黒住秀雄さん等の破壊阻止追及に町教委の担当として、保護・保存と開発の板ばさみになっていました。とにかく文化財の破壊はニュースになるものですから新聞記者を連れてきて、青筋をたてて怒鳴るんですが、歴史の話は役場内では私しか対応できなくて、次の日は知らぬ顔をして、別の話題を持って私のところに来ていました。未発表の遺跡や文化財を見つけてきて新聞に載せるのが趣味のようになりました。私も負けなように休日返上で町内を廻るようになりましたが、黒住さんには敵(かな)いませんでした。

岡山県教委による備前地区文化財担当者研修にも参加し岩津先生・藤井駿先生・市川俊介先生とも顔なじみになりました。辛川天神山七つ塚の発掘には県と鎌木先生を繋(つな)ぎました。昭和46年の合併により岡山市教育委員会へ配属され、この頃吉備津彦神社の御田植神事を、県指定無形文化財にという機運が高まり記録保存が行われることになり、黒住氏は拒まれたのですが私と岸統(きしおさむ)氏が地元関係者に選ばれ、私が吉備津彦神社の歴史を担当することになりました。以下は報告書を昭和54年に発行していますので略しますがこの時、山の形と古代の神社仏閣は関わりがあるぞと認識したのです。これは古代吉備国を語る会の30周年記念誌「吉備されど吉備」に岡山県内に私が見付けた27箇所を紹介しています。

奈良東大寺の正倉院御物と同一と云われる「奈良三彩」陶片を発見したのもこの頃でした。吉備津宮境内古絵図にある神力寺の本堂辺りの現在菜園となっている所を通りかかった時、趣味の楽焼の破片かと思ったのですが手にとって見ると下地の布目が気になって、黒住さんに見せた所、名古屋大学の檜崎先生に連絡をとって調査を依頼しました。昭和48年発行された陶磁器大系五巻に載っています。

(三)朝鮮半島との歴史観

そんな黒住さんと朝鮮に探検旅行の話が持ち上がってその気になったのですが、黒住さんの親族が全

羅南道木浦で47棟の蔵を持つほどの大地主で、関係者が訪れたら報復すると云う噂に、途中止めとなりました。私が最初に韓国旅行に行ったのは、かみさんと7年前になります。ソウル観光でした。最後の半日、国立博物館を見学しました。和文の説明が少なくこれには失望しましたが、展示物の質と量にはさすがと感心しました。金達寿や李進熙の吹聴していた古代朝鮮は「倭」より文化が高く、古墳から出土する遺物は先進地朝鮮から文化を伝達してやったんだと放言して、それを又、上田正昭氏が神輿をかつぐもんだから、大いに誤解していました。

岡山空港から北に飛んだジェットは米子を過ぎて西北へ一直線に仁川空港を目指します。大白山を過ぎた頃から目の下には、山と川と高速道路のほかには条里の遺構等田圃は全く見えず高い文化で豊かな国ではなく、大中国と倭寇による略奪と収奪による苦難な国「朝鮮」だったと思うようになりました。

「三国史記」(さんごくしき=韓国の日本書紀と称されている)と云う本が岩波文庫から出版されていて、日本の古事記日本書紀より新しい1145年に書かれた撰本ですが、これに紀元前50年に赫居世(かくこせ)王(百濟)8年の条に、倭人兵をつらねて辺を犯そうとする記事が見えます。「赫」姓は中国五胡十六国にも大夏国王(407~431)の姓となっています。同じく「三国遺事」と言う本は13世紀に一然と云う僧による私撰があります。両方とも新羅国の古記録から採用したようですが、現在は原本が確認されていないため不明で、両方の記録に共通しないものが多い。と言う事で問題もあるものの、他に史料が無いため用いますがこの「三国遺事」にも「紀元479年倭国の兵来たり、侵略す」とあります。(少なくともこの来寇は海賊とは異なると意識すべきです)

現在日本では前方後円墳出土のほとんど全ての副葬品が天皇又は倭王からの下賜品を副葬したと推定するのが通例ですが、私は韓国征伐を主宰する地域の豪族から呼び掛けられて、桃太郎の鬼退治、犬・猿・雉のように追隨して出征し、無事帰還してきた者が古墳築造の権利を与えられ、その子孫はそれぞれの地方の名族として君臨することが出来たのであります。各々葬礼に当って当時でも高価な太刀・豪華な装飾品、珍しい馬具、日本で着用する事が証明されていない。貴族が着用する衣装の帯止めのバックルなど、市場へ出せば相応な値で取引できる品々を副葬することなどは理解できない私です。被葬者が事ある毎に「手柄話」で語り、同じものは各々相続し、残った者達が冥土まで持たせようと話し合った結果の副葬ではないでしょうか。それ位朝鮮への船出は利益があったと思っています。朝鮮だけでなく台湾から南へも行っている可能性が多いと考えています。彼等は商売(貿易)も兼ねていたのです。それと考古学は総合科学で究明する態度・姿勢が必要と考えています。あらゆる分野からの意見集約が必要です。

(四)オリエントと風水思想

私は過去6回岡山市の洛陽会(岡山市職員で構成)から中国へ訪問して現地で遺跡を見、考えましたが、中国に於いても形の良い山、たとえば「嵩山(すうざん=道教五大名山の一つ)」には達磨大師の少林寺(ここは風水福地です)、儒教の「院」や道教の「観」が複数残っています。文化は高い所から低い所へと「水」の流れのように移って行くと言う考えがあります。一つの考え方としては誤りではありませんが、遣隋使以前の日本に何故風水が存在するのか。弥生時代はおろか縄文時代に遡るのは何故かについての疑問が残ります。私の意見は約3万年~1 万年前まで「ウルム氷河期」が起こり多量の水分が雪氷として陸上に堆積し、そのために海水が百メートルから二百メートル近く下がったために、北海道と北九州に於いて大陸と陸続きになり(日本海は殆ど陸地で当時東北は、現在ほど雪は多くなかった)これを通路として中・新石器人=東胡族(ツングース)が到来するが彼等の持っていたオリエント哲学とも云うべき文化ではないのか。

中国に於いて儒教・老荘学・道教と発展した。これらオリエント哲学が日本に於いてもある程度進化していて遣隋使たちが中国の最先端のこれらの文化に遭遇してもカルチャーショックを受けることが無かったばかり

りか、乾いた土が水分を吸い込むように全てを理解する「IQ」を持っていたのではないかと考えています。

最近の考古学の全書でも縄文遺跡周辺の環境的な位置などの報告にも、これを伺わせる記録が見え出したように思います。食を得る為の特別な場合を除き、現在でも住居を選ぶ条件で、風の当らぬ、日の当る、良質な水を得る環境が大切です。水の浸さぬ高さで、私は形の良い誰でもが認識できる環境景地の近くに遺跡は多いのです。これはそれ以降に、古代神社仏閣の建築される所でもあります。明治神道では神社境内は神聖な地で墓に類する古墳は、有名な神社の境内には存在しないといって来ましたが、備前備中の吉備津神社には古墳が存在します。こう云う所を中国では風水福地と言い習わしてきて居ります。

現在では中国を中心とするオリエントの見方と私は言っていますが、南アフリカの南端から6万年前に北を目指したホモサピエンスの古郷であるケープタウンの良港の背後には、東洋の風水に共通する形の良い山(ケープ富士)が存在し、後の航海の目標点となっている事実があります。ひょっとすると世界通用なのかも考えたりしています。

(五)中国大陸との歴史観

それでは中国文明について述べてみたいと思います。言葉としての中国文明の「文明」とは人知が進んで世の中が開け精神的、物質的に暮らしが豊かになった状態、特に宗教・道徳・学問・芸術等の精神的な文化に対して技術・機械の発達や社会制度などによる経済的・物質的文化を指します。「文化」とは人間の生活様式の全体、人類が自らの手で築き上げてきた有形無形の成果の総体、それぞれの民族・地域・社会に固有の文化があり学習によって伝習されると共に相互の交流によって発展して来ました。カルチャー＝文化のうち特に哲学・芸術・科学・宗教などの精神的活動およびその所産、物質的な所産は文明と呼び文化とは区別されます。また文化とは世の中が開けて便利になる、生活内容の高まる文明開化のこと。多くの語りの前に付き新式・モダン・便利なことを指します。

考古学はこのような文明・文化の遺跡を発掘調査して、その時代を解明するのに、現在の風水も神仙道も知らない考古学者の発掘、或は警察の鑑識のような方法で良いのであろうかと私は疑問に思っています。古代人の持っていた思想・哲学・風習はどのように発掘報告に加味すれば良いのか。古墳を造った人達がどのような哲学を持っていたのか、誰が考えるのか？。文明の定義のうち諸文化について説明の不足があります。国防のための軍備と武器・兵法が書かれてなかったのです。これが戦後の学者の考えの足りない部分と考えています。軍備と武器は重要な国策でありまして、吉備真備の2度の入唐に際しても兵法以外は持ち帰ることが不可能でした。

世界の四大文明と云えばエジプト文明・メソポタミア文明・インド文明・中国文明であり、それぞれ大河によって育まれています。文明史はまた数学史でもあります。中国2000年前の河図洛書(らくしよ)には世界初の魔法陣が示してあります。各文明は他の文明と交通・通商することで経済を発展させています。

魔法陣＝古代のナンクロとも云えます。1～9の数字を1つずつをもちい、縦・横・斜めに同じ数を並べます。

左から2・9・4 その下の行に7・5・3 その下に6・1・8 とすれば答えはそれぞれ15となります。

どの位、高度な数学であるかは別として、最初に示された数学的文化の一端です。

アジア・西アジアを含めると三代文明はアジアから生まれていると言えると思います。ほとんどが氷河を水源とする大河でした。

中国文明とは何か。中国文明を一般的に云えば「中国は漢民族が担い5000年(6000年とも)の歴史を持ち世界文明の中心＝中華思想で繁栄してきた」と言うことになりますが、また人類の部族の移動の面から考えると中国は母系の農耕文化を持つ原中国人・トルコ族・南方モンゴロイド族が1:2の土着族と支配層として新モンゴロイド・トルコ族・モンゴル族・ツングース族の民俗集合体であり、新モンゴロイド間の覇権争

いの歴史であったと言えます。歴代の国王のうち漢民族の王は「漢・唐・明」ぐらいで、あとは胡(えびす)であったのです。

中国の初期農耕文化の担い手は原中国人でした。6万年まえに南アフリカを出発し北上。4万年前頃に到着したホモサピエンスが繁殖した楽園がスダランドと呼ばれる土地(タイ中央を流れるシャカオプラー川が氷河期に形成した広大な沖積平野)で現在ではタイランド湾から南シナ海へかけての海底に没してしまいました。

海中に古代の川を発見したエピソード

大正時代に海図作成のため、ヨーロッパ人が測量作図をしたところ、等深線で河川状の地形が表れたため、かつて陸であったと確認された。水は水中では河道を抉(えぐ)ることは無く、等深線で川が確認できれば、水面上の時期を示すのがご理解できるでしょうか。

マレー半島東海からインドシナ半島に接する大陸棚で紀元前7万年旧石器時代のころから紀元前1万4000年の中・新石器時代の頃にかけての氷河期には陸地であった。広大なスダランドはアジア民俗の故郷で、紀元前5万年頃から一部が陸地伝いに北上し(気候環境の変化が大きな原因です)モンゴル(バイカル湖付近)やシベリヤにまで広がり混血のマンモスハンターになったのです。日本にも来た縄文人と共通しています。彼等は徐々に寒さにも適応して北方系アジア民族になったのです。一部は海洋民俗として太平洋に広がりました船を使わずに移住しています。

一部の人々はスダランドと陸続きになっていたジャワ島やバリ島からオセアニアに移住しました。オセアニアにもオーストラリアの間に海面下に沈んだ平野があり、サフルランドと呼ばれています。同様に同じ時期、世界には数ヶ所同じような草原があつてこのスダランド発の住民と海洋民が移動して原中国人となり、水耕稲作を始めて、母系の農耕文化を開花させますが、次第にモンゴル高原(草食動物遊牧民)の新モンゴロイドが南下して文化的影響を与えるようになります。8500～9000年前に長江下流域で彭頭山(ほうとうざん)文化(縄目模様の土器を持つ)で、稲の栽培(住民が栽培を意識し栽培を始める)が伝わり、河姆渡(かぼと)文化、大溪文化(7000～5200年)(環濠集落を持つ)に繋がり黄河中流域で粟の耕作や豚の飼育を中心に斐李岡文化、及び後李文化が登場し仰招(ぎょうしょう)文化(5000年前)トルコ文化から**青銅器**(注参照)文化(5500年前)この時代、新モンゴロイド(トルコ系・モンゴル族ツングース族も放牧を営んでいた)河姆渡文化は8000年も前から西アジアの文化の影響を受けていました。農耕は1万年前に西アジアで起源があつたとされています。牧畜もほぼ同時期であり、遊牧はそれよりやや遅れるが牧畜の延長として発生しました。遊牧はテントを持って移動します。牛や馬ロバの背に負わせて行きます。鉄を人類が知ると先ず一番に使用したのは武器ではなく発火具と私は考えています。遊牧に必要なのです。

青銅器 金(かね)に方向を与えます。青龍・朱雀・白虎・玄武は東南西北となります。錫はあおがねと呼び銅はあかがね、銀はしろがね、鉄はくろがねで中央は黄金(真金=まがね)となります。銅は純銅ですと軟らかく錫と混ぜることで硬さを増します。それで青銅と名づけました。 編者・・・納得

中国と西アジアは4000キロ以上離れていますが、間にヒマラヤを挟み非常に隔離感がありますが、この二つの文化圏は古代から密接に繋がっていました。およそ8000年前から始まっているとされ、その地域は黄河地域に限定されていて、おそらくは粟や麦の農耕により定住する民が現れた頃と時期を同じくするようです。黄河流域は、1万年以上昔は比較的温暖で雨量も多く旧石器の遺跡が多数発見されています。さらにその住居の歴史は20万年以前の原人の頃から確認されており、森林地帯で狩猟採取に適した地域でありました。しかし黄河地域での遺跡は1万年前を最後に 2～3000年間発見されていないのです。その理由は気候変動と同時に黄砂が降り続いて砂漠化し、人も動物も植物も生存できない環境に変化したためとされています。しかし、黄砂の特徴である砂と粘土の間のシルト層(碎屑物・粘土と砂の中間の砂土)土壤

問題提起「邪馬台国は吉備だった」

日本先史古代研究会会員 前田忠興（広島在住）

（一）古代王権は吉備が発生の地・・・記紀（正史）は抹殺した

先史究明を志す者は記紀に書かれた「天孫降臨説」を信じるものはいないと思う。これは「天皇」を現人神（あらびとかみ）とすることによって成り立つ「神話」である。唯物史観の始祖の言葉に「全てを疑え」という言葉もあり、私は「神話」であり遙か後に創作された虚構である。記紀に自らの論拠を求めることを恥とし全く認めない。

広島に住んで異なる私は吉備人の感性には博ms人と異なり容易には理解できない独特な思いがあることを感じます。「天皇」に関してですが、王権体制が当初は吉備にあった事実を逆に論証することにも継ぎ。吉備邪馬台国説を補強することにも継ぎと思われることですが古い「天皇」に対する独特の親しみがあることを感じます。

秦氏一族の流れが邪馬台国を支配し指導していた時期が当初にあったことは、吉備＝岡山とする狭義の吉備以外にも秦氏一族の足跡が数多く残っていることから明らかであり、吉備や広義の邪馬台国一円に無数の史跡が残されていることから明らかです。私は明らかな現実を根拠に事実を主張する者であり、作られた「記紀」史観に論拠を求めることは、ここでも拒否します。それは唯物史観の始祖が指摘した「不可知論」に継ぎことであり、それこそじゃれごとで終わってしまい、唯物史観の始祖が厳しく批判し否定した何の結論も求めようとしない、際限ない「討論クラブ」に終始するからです。

全ての吉備人に謂れのない「元祖風評」をきっぱり否定する気概が、深い根底にあることを感知する私は「元祖風評」を社会的にも克服否定しそこから解放された社会の出現を求めるものです。

そこに社会を変える真実の歴史家の使命があると確信しています。

（二）吉備族＝秦一族は抹殺された

飛躍がありますが原子力の「平和利用」という言葉が、最初の被爆地である広島の人をも原発容認に動かしたように、奈良時代に絵にもなり清廉大人を地で行くような立派な人物像に加え聖徳太子という名は体を表す立派な名前迄与えられた架空の人物が必要上神話上に作られたと思います。

「大化の改新」という大仕掛けを表わす名の下に歴史から抹殺された一族は、実は公にされている蘇我一族ではなく秦一族ではなかったか。という妄想とも思われる疑念を思いつきました。空想癖が過ぎたのかとも思っていますが、この疑念はあれだけの影響を与えた秦氏一族に対する記述が「記紀」に殆どないことから生じています。聖徳太子「像」は案外復古後の明治になってつくられたものではないかという疑念が新たに生じました。時代的に何時頃の「記紀」から聖徳太子像が出現したかを調べることもありと思いますので提案させてください。英明な諸兄の御力で御明解を願っています。敢えてここで疑念として提起いたします。

編者追記 24年度の日本先史古代研究会の定期総会・講演会のフリートークで前田氏の冒頭の問題提起は岡山県に在住する多くの会員に強い共鳴を呼んだ。氏にお願いして寄稿文を寄せて頂き、当日参加出来なかった会員の皆様にとの思いで掲載させて頂きました。

笠岡高島からの便り

日本先史古代研究会会員 藪田徳蔵

拝啓 大変ご無沙汰して居ます、皆様お元気ですか。昨年は遠路高島にお出で頂きまして有り難うございました。この度は“きび考”5号有り難うございました。冒頭の「高島探訪紀行」驚きと感謝で言葉もありません。ご好意に満ちた記事と微に入り細に亘った数多くの資料記事に、編集の御苦勞、ご厚情が伝わってきます。感謝の言葉もありません。日本先史古代研究会の皆さんとの交流に不思議なご縁を感じます。

私も河田さんも教育らしい事を受けずに社会に出ました。当時は全員普通のことでした。小島の小学校には教室が二つで、復々式授業で1・2・3年生は女先生、4・5・6年生は校長先生が担任で、自分が小学6年生の昭和16年12月8日に世界の強国を相手の無謀な戦争へと突入した時代です。そんな不安の中で小学校の雰囲気も日々荒(すさん)でいくようでした。高等科2年は神島外へ船で通い現在の中学2年で卒業しました。当時は国策で満蒙開拓義勇軍の割り当てに先生も悩んだらしく本人や親を説得していましたが、私の親は「お前に百姓は無理」と大反対で、結局鉄道員に応募し大阪吹田の教習所に入所しました。敗戦真近な頃で一平卒として、銃後の国民を護る訓練に飢餓の中、空襲だ片付けだ大変な日々でした。そんな青春時代を顧みて平和であることの幸わせを改めて感じます。

今年は地球異変のためか春の訪れがやっと来た感じで、梅や菜の花が急に咲いて明後日は4月です。4月8日にツツジ祭りを控え忙しくしています。私達の為に催して下さっている様で感謝していますが、整備も今年がもう限界です。10日間位整備していますが範囲が広く老体ですので中々はかどりません。3月27日自治会で遊歩道の草刈をして下さって、その折「子妊(こはらみ岩)」周辺の姥目檜(うばめかし)の伸び過ぎた枝を若い方にカットして貰いました。眺望が開けて良くなりました。5月13日に笠岡ロータリークラブ(笠岡の名士)の方々42名が来て下さる事になりました。子妊石の素晴らしさを宣伝する最後のチャンスだと楽しみにしています。

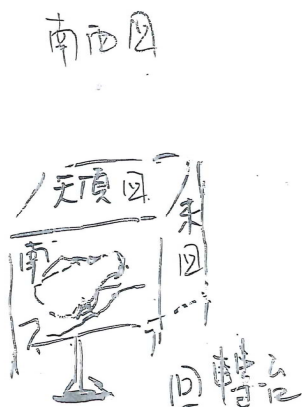
私も家内も83才の超高齢になりました。元気な所を探せば口(くち)だけのようです。家内が根気良くしてくれるので助かっています。草刈清掃のお心使い大変有難く思います、人口減少が加速している現状では維持は不可能です。お心使い本当に嬉しく思います。若し高島にお出での折が有りましたら、一緒に子妊岩の探査・研究をして頂けましたらと思います。有意義で楽しい成果もあるのではと思います。

通称を「子妊岩」と称しますこの岩は、昔から七つの不思議のある石として伝えられています。正しい形状・寸法等は一人では難しく図解もかなりいい加減で「盲蛇におじず」のたとえ、我乍ら強心臓だと思っ
ていますが、およその大きさは東西8.3m 南北5.5m高さ4.7mの大きさで下部の据付岩盤が段差1mの高さで、その上に被さった形でこの大きな子妊岩が乗っています。下部の据付東部分に小石や土砂で埋め立てられていました。多分昔の人が地震などの用心のため埋めたものと思います。当初の意図とは違うように思えて思い切って昨年巨石の頂と末辺の据付部分の下部の小石・砂利を除去しました。1m位岩盤と巨石の間に斜めに2.5cm~3cm 隙があるのが鮮明に浮き出て当時の施工者の「こんなことも出来ますよ」とそんな想いが感じられます。難度な地盤を特に選んで高低差勾配差を克服して、巨石を最小限の範囲にバラ

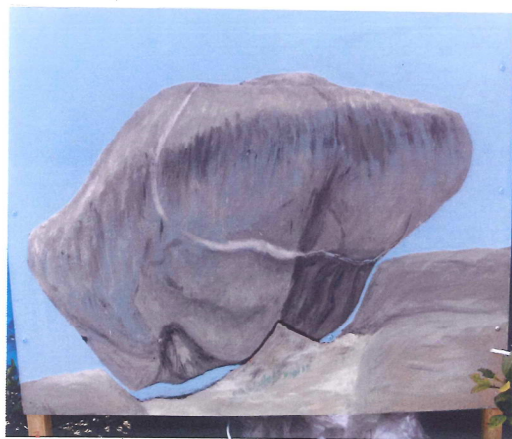
ンスを考慮しての技術は素晴らしいものです。北に大自然の女神を南に人工の女神を彫刻して天頂には北の割目を縁取りして天上神女神その脇に海上神女神。二つの天頂御神体を神竜が巻き込み竜の水場あり之は将に国宝級と思います。認められて維持管理が少しでも入れば、ボランティアなどの若い人達との作業の後で頂上部での歴史談義に花が咲く日が来るのではと願っています。まずは笠岡市を動かす事からと考えています。

昨年歴史ウオークを5月 15 日に開催されました。神島外浦の氏神様は神武天皇様が祭神で高島から遷したものです。現在長鋪(ながしき)汽船の社長(85 歳)さんが氏子総代をされて居られます。昔お祖父様の長鋪丈太郎さんが「外浦の高島」当時の関係で世話人代表として活躍され大きな足跡を残しておられます。高島山頂の行宮遺跡碑・浜の鳥居・明治天皇忠魂碑・石段等の整備に尽力されました。平成 22 年 9 月 23 日に長鋪社長さんが神島に建立の神武天皇碑除幕式にお招き戴き、それがご縁で高島の磐座写真等を見て頂くうちに歴史ウオークの運びになりました。食費交通費とも無料とあって 300 人以上の申込者が殺到で好天に恵まれ大盛況でした。

今年また笠岡ロータリークラブの役員である高島出身の議員さんの奔走等も在り笠岡市役所・教育委員会そして河田法二さん発掘出土品を研究して居られる岡山商科大学講師の佐藤先生を招いての出土品から瀬戸内の歴史の変遷など学んだ有意義な格式のある一日でした。長鋪さんの息子さんの推薦のようですが高島に決まりました。42 名の立派な方とその家族も来られるかもしれません。子妊石を解ってもらえる最後のチャンスと思っています。現在 90cm×80cmの立方体に東西南北の立面図を書いて回転して案内するように工夫しています。絵らしいものは小学校以来初めてですが油性ペンキ 5 色で書いてみました。



藪田さんの看板のイラスト



看板に描かれた子妊石

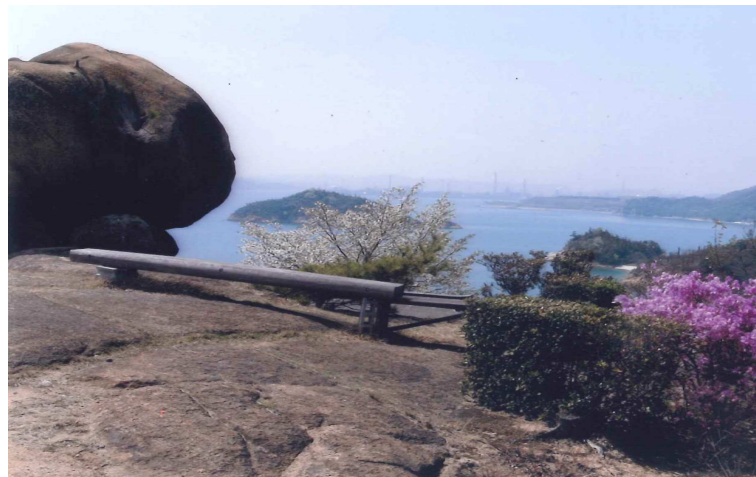
子妊石は古代唯一の交通路で海の灯台でもあり(西南面が鏡板状)命をかけての遠征冒険の勇者たちにとっては、安らぎくつろげる場所に妻や子供のいる所。平和が一番願うのは女性。憩える場所、祈りにも似た願望がこうした形になって子守姫石をいれて5つの女神・御神体になったものと想像しています。天変地異疫病海難戦いのない平和を祈った場所、また潮待ち水補給等東西の潮の合流この地点は陸地沿い

に小型舟のオアシスで潮流を利用する指針は天目岩で多分潮汐表も作成されたと思われます。北の港を神島が屏風のように西風を明地島が遮り、南は高い崖山、東は高い山で海は巨大な濠となり、将に要塞型城郭。水は粗い花崗岩の風化砂が固い岩盤の上につもり、雨は濾過され地下の花崗岩の層が水脈になっています。真名井の中腹のような湧き出る場所も7箇所位ありますが3つも掘れば地下水は出ます。昭和初期神島の工場用水を高島の4つの井戸で賄ったと言われています。

天津磐境を中心に東西南北に配置された磐座は祈りと共に有事には見張りや連絡場所に変ったと思われます。西の磐座に配置された子妊石は平和への祈りとその据付技術の粋は武力誇示にも見えます。平和を願いながら、現在の国際間の宇宙衛星やミサイル発射核実験等にもどこか似通っているようです。

駄文を一杯書いてしまいました。調査研究や編集等大変なご苦勞をお察し申し上げお礼の言葉といたします。今後とも宜しくお願いします。

藪田徳蔵



編者より

写真左の子妊石と磐座の頂上部で瀬戸の海を眺めながら藪田夫妻の団欒が続く。住宅はこの丘の裾にあるが83歳を越した昨今では登り下りも、肉体的に大変な様子です。

来訪者にご案内するのは嬉しいことですが、体力がぼちぼち限界とのお便りを戴きました。

2012.24.4.3 受



左＝丸谷氏に高島の地図で説明する藪田さん

九州説と畿内説の邪馬台国論を考える(2)

日本先史古代研究会会員 中島康之

(五)間違いだらけの「邪馬台国」畿内説 安本美典氏から学ぶ

今(いま)日本の考古学界が大きく揺れている。大報道された旧石器の発掘が捏造であったと言う。発掘者は自分が埋めた物を取り出していたのだ。考古学の発掘がしばしば、より古いものなら良い、より新奇のものなら良いとの宝探しの状況となって、発掘者の主観に基づく判断まで大きく報道され、発掘者以外の人から出される疑問や検討の要望は片隅に追いやられる状況となり、そのツケが一気に噴出した感じである。発掘の成果については、色々な立場の人による十分な論議や検討が必要だ。また検証の方法についての厳密化が求められる。

邪馬台国問題も又そうである。最近の新聞・テレビの古代史関係の報道では「邪馬台国畿内説」へ草木もなびく観がある。この問題については、既に議論の決着が付いている式の特集を組んだマスコミ＝週刊読売もあった。「邪馬台国畿内説」を強く主張する方々の論理はあまりにも粗放である。思い込みの為か、基本的な事実についての誤りが多すぎる。記紀等を始めとする日本の古文献については、江戸時代の本居宣長の「古事記伝」など以降膨大な研究の蓄積がある。畿内説に立つ場合はそのような研究資料のほとんどを放棄して省みない事である。畿内論者のほとんどが、記紀の古伝承と十分整合的な古代史を構築することは、不可能と見られる。

畿内説は「考古栄えて記紀滅ぶ」と言われる程、日本の古典を考慮しないことによって成立している。一方の「邪馬台国九州説」の立場に立つことによって「記紀」など日本の一級資料を生かす道が開かれる。記紀では大和朝廷の始源は九州に在ったと記されている。九州説をとれば日本の古代に付いての構造的なイメージがつけれる。歴史学はすぐれて総合的な学問である。中国の文献・日本の文献にも公平に目配りしなければならない。日本の古文献を意図的に無視してはならない。

(六)宣伝優先主義の誤り

「邪馬台国畿内説で決まり」式の議論が盛んになったのは、奈良の黒塚古墳出土の三角縁神獣鏡が34面出土したことや、同じく奈良のホケノ山古墳が発掘され、中から「庄内式」と言われる土器や「画文帯神獣鏡」が出土し、新聞・テレビなどのマスコミで、これ等が邪馬台国と結び付くものとして大きく報道されていることに関係している。

これらの発掘を行ったのは奈良県橿原考古学研究所という公的機関の所長樋口隆康氏である。発掘以前より強力な畿内説に立っている樋口氏は、これら黒塚・ホケノ山古墳の発掘の結果をキッカケとし、材料としてすべてを畿内説の立場からのみ解釈し結び付け、マスコミを通じて大々的な宣伝を繰り返す挙に出ている。そしてその発表内容は単に発掘された事実に付いての解釈の相違と言う範囲を遙かに超えている。発掘の成果自体とその解釈とは本来分けて考える必要がある。発掘が示している事実は発表されている解釈を導くものかどうか学問的に充分検討される必要がある。銅が出ているのに金が出たと発表しているようなことはないか。現実には学問的検討よりも、マスコミ受けの発表の方が優先されている。地味な形での批判や疑問点の指摘等は、マスコミの喧噪にかき消されているのである。

かくて樋口隆康氏などの事実無根の発表などが大々的にまかり通ることとなる。しかし誰かが、今こそ確りとこの問題点を強く指摘しなければならない。多額の費用を掛けた奈良県の県をあげての地域おこし、宣

伝事業に邪馬台国問題が利用されている面が、今や強く出ているのである。年代が異なり邪馬台国問題の解答と何等結びつかないものが、結びつけられて報道されている。報道内容はしばしば事実や論理的整合性や学問的検討の結果と無関係である。

(七)樋口隆康氏の説がいかにも誤りと無根の事実満ちているか？

樋口説・・・黒塚古墳・ホケノ山古墳出土の三角縁神獣鏡・画文帯神獣鏡が邪馬台国問題、卑弥呼が魏の皇帝から与えられた鏡 100 枚と関係があるとする。すなわち「卑弥呼の鏡」であるとする。

反論 1・・・魏の境域内では、この二種の鏡は全く存在しない、また魏の国内からも一枚も出土していない。(中国考古学者 王仲殊・徐芊芳 中国社会科学院考古学研究所)

反論 2・・・三角縁神獣鏡は畿内では、四世紀の古墳時代の遺跡からのみ出土し、邪馬台国時代(三世紀)の墓には全く出土していない。更に鏡の直径平均 22~23cmで、中国から発掘される後漢・三国時代の鏡よりはるかに大きい。したがってこの鏡については、中国から輸入された鏡ではなく我が国で作られた鏡と思われる。(森浩一・奥野正男説)

読売説・・・第七号鏡は画像文帯の四神四獣鏡である(以下省略)しかし三・四世紀の日本で「象」特に「駱駝」の絵が描けるとは思えない・・・だからこの図像があるだけでも、この鏡は中国製としか考えられないであろう(読売新聞掲載)

毎日説・・・鏡を鑑定した樋口氏は「当時の倭人が見たことの無いラクダの模様を作れるはずはなく“銅出除州帥洛陽”の銘文通り鏡は中国で作られたのでであろう」・・・と話している(毎日新聞掲載)

反論 3・・・上記の理由でどうして「中国製としか考えられない」との説になるのであろうか。たとえば次のような議論をすればその論理の粗放さが伺える。「キトラ古墳には、白虎が描かれている。虎は日本にいない動物である。当時の日本人が見た事の無い虎を描けるはずはなく、キトラ古墳の壁石は大陸から輸入したものであろう」・・・式のものである。文化の伝来・工人の渡来等様々な他の可能性がありうるのに、すこしでも「中国鏡説」と結びつくものは、中国製説のみの立場から解釈しようとしているように見える。樋口氏の論法は始めに「三角縁神獣鏡=中国製説」ありき・・・なのである。

邪馬台国畿内説を取る方々の中にも、三角縁神獣鏡などは卑弥呼の鏡では無いとの説をとる人も決してすくなくない。

○河上邦彦(橿原考古学研究所)は黒塚古墳の直接の指揮者であるが氏自身も三角縁神獣鏡が卑弥呼の鏡などではないと明言している。(関西大学大学院終了)

○石野博信(徳島文理大学)も卑弥呼の鏡ではないとの文を発表されている。(関西大学大学院終了)
白石太一郎(国立歴史民俗博物館教授)も邪馬台国畿内説ではあるが鏡については、「日本列島内で400面近くも出土しているにもかかわらず中国大陸で一面も出土していない鏡(三角縁神獣鏡)を中国鏡と考えるのは論理的に無理」との説を唱えている。

京都大学は近畿に在る、かつての王城の地であるそこを発掘すれば、多くの物が出土する地の利が与えられている。京大勢がリーダーに当然成りやすい。現在京大を中心とする考古学者たちはどんなに論理的に無理があろうと「三角縁神獣鏡=卑弥呼の鏡」説に固執して止まない。強力な刷り込みが行われるとそうなるのであろうか？

(八)ホケノ山古墳に付いての七つの疑問

そもそも邪馬台国論争は魏志倭人伝の記述から始まったものである。ホケノ山古墳の示す事実は倭人伝との記述の違いがあまりにも多すぎる。

①“棺あって槨なし”の魏志倭人伝の記述に合わない。

ホケノ山古墳では木槨木棺が見つかっている。木の枠で囲った部屋があり、その中心に木棺があったという。

②画文帯神獸鏡は中国北方の魏の鏡でなく、中国南方の呉の系統の鏡である。

ホケノ山古墳からは上記の鏡が出土している。中国の魏の国と交流があった邪馬台国の鏡としては相応しく無い。この鏡はわが国では 150 面ほど出土しているが、四世紀の古墳からの出土で、卑弥呼の時代と異なる。すなわちホケノ山古墳の築造年代は説に合わない。

③魏から賜った鏡にしては数が多すぎる。

三角縁神獸鏡はすでに全国で 500 面以上出土、画文帯神獸鏡は 150 面ほど出土、合わせれば 650 面に達する。卑弥呼が 100 面賜ったと倭人伝に唯一度だけ書かれている数を大幅に越してしまう。

同志社大学名誉教授森浩一氏は言う。「過去に存在した鏡の現在の出土率は、多く見積もっても 10%程度であろうか」と。すなわち 650 面の鏡が出土する為には、過去に 6500 面の鏡が中国から輸入されなければならない事になる。卑弥呼が魏に使いを出した 239 年頃から魏が滅ぶ 265 年まで 26 年間である。この 26 年に 6500 面も輸入する事は毎年 250 面の鏡が平均的に輸入されなければならないことになる。森浩一氏の 10%はかなり高めの推定である。仮に 5%の出土率と見れば 1 万 3000 面の鏡が 26 年間の間に輸入されたことになる。中国で一面も出土の無いこれらの鏡がこのような数で輸入される事自体論外の説ではないだろうか。

④ 公平な年代比較が行われているか。

ホケノ山古墳の築造年代を三世紀中頃卑弥呼の時代と同世代との見解には大いに疑問がある。しかし仮にその点を一步譲って卑弥呼の頃であるとしよう。この場合でも以下のような事実が残る。九州前原市の平原王墓は、三世紀の卑弥呼の時代とすることには現在の考古学では異論のないところである。

(イ) 平原墳丘墓は「棺ありて、槨なし」で倭人伝の記述に一致する。ホケノ山古墳は合わない。

(ロ) 平原墳丘墓は北中国系の鏡、魏の系統の鏡のみ出土して、南中国系の鏡は出土していない。ホケノ山古墳からは、南中国系の鏡(呉の系統の鏡)が出土、北方系の鏡は僅か二面の出土にすぎない。平原墳丘墓からは北方系の鏡ばかり 40 面出土している。

以上からも九州平原王墓の方がホケノ山古墳よりもはるかに倭人伝の記述内容を満たしている。これ等の事実から見ても、どうして「邪馬台国畿内説」が有利になるのであろうか。本来年代推定等かなり確かな平原王墓を基準とせず、証拠に乏しいホケノ山古墳で年代を決めようとする事自体、無理がある。

⑤ 鉛の同位体比の研究成果の面から反論

馬淵久夫教授(作陽大学)の説による

更に日本古代史全体を考える上で極めて重要な意味がある鉛の同位体比に基づく研究がある。

鉛は産出地によって「質量が異なる」、鉛は四つの質量の異なる原子の混合物で、その混合率(同位対比)が産出地によって異なる点である。四つの同位体(204・206・207・208)これを基準に青銅器の製作年代を考える上で重要な基準・手掛かりとなる。

- 三角縁神獸鏡・画文帯神獸鏡→中国南方系の銅原料を使用
 - 九州弥生時代平原王墓出土の鏡→中国北方系の銅原料を使用
- 材料(銅)の出土地域に違いがあることがはっきりしている。

⑥ ホケノ山古墳の築造年代を卑弥呼の時代に合わせる為、無理をして古めに推定しているように見受けられる。

関川尚功氏(樫原考古学研究所)によると、日本書紀の伝承では箸墓古墳の被葬者は崇神天皇の時代に活躍した倭迹迹日百襲姫とされている。一方崇神天皇陵古墳については四世紀中頃築造と見るのが現在の考古学者の多数意見である。とすれば箸墓古墳の築造年代も当然四世紀中頃と同時代とした方が文献的事実とも一致する。ならば箸墓より時代が少し遡ると見られるホケノ山古墳は四世紀頃まで時代が下がる可能性が大であろう。総じて邪馬台国に結び付けんが為の無理な考え方に他ならない。

⑦ 矛・絹・鉄等を無視してはならない。

倭人伝に云う「倭人は兵には矛を用いる」と。銅矛であれ鉄矛であれ矛が多量にしているのは、畿内ではなく北九州である。ホケノ山古墳から矛は出土していない。また倭人伝には「倭綿」「帛布」など幾つかの絹織物が登場する。魏の景初三年の詔書に見える倭の女王卑弥呼に下賜された、品物リストの初めに掲げられているのは、絹であって鏡ではない。そして邪馬台国のあった弥生時代後期までの絹はすべて九州から出土している。

布目順郎氏(京都工芸繊維大学)の意見では「発掘の進んでいる近畿地方に、今後質的にも量的にも、九州を上回る弥生時代の絹が出土するとは考えられない。」そうした立場に立つならば「絹から見た邪馬台国の所在地推定」の結論は自明と言うことになる。

連載 考古ファンのじゃれごと⑤ 先史時代の東アジアを共有した

倭族=安曇族は海人(アマ)だった！！

日本先史古代研究会会員 山崎泰二

(一) 天神・海神は同じ「あま」の神

弥生時代に水耕稲作が日本列島に伝来し急速に普及しました。その後弥生末期には大陸の北方系遊牧・騎馬民族がハイレベルな知識(主に天体)と技術(主に金属加工)を日本の先住民である農耕民(弥生人)と融和しました。当然彼等は尊敬され崇敬されます。八世紀の初め日本の国体が整い、古事記・日本書紀(以後記紀と称す)を担当した官人は、この両方の民族の持つ特性を神話の形で残しました。新しい国体(律令体制)の中心である、大王(おおきみ)(後に天皇と称する)は天神信仰を持つ大陸の北方民族の天の神を崇拝します。先住民の弥生人は、南インドから中国の江南地方で発達した水耕稲作を持ち込んだ農耕民です。彼等にとって水がとても大切でした。水の神は竜神で海の彼方で発生した雲に乗ってやって来て雨をもたらすと信じていました。海の彼方には竜宮があり、幸が豊富にあると信じていたのです。

天も海も「あま」と称します。「あまのかみ」は両方の民俗の原点なのです。見事な合体です。一般に騎馬民族は征服形だと申します。中国大陸の歴史は異民族の征服支配の連続です。幸いに日本列島に来た騎馬民族は最強の武器である「馬」を伴わない形で渡来しました。先に述べた知識と技術で農耕民の信頼と崇敬を得て支配層に君臨します。そのうえ先住民を大切にしました。日本最初の正史と云われる記紀には、数々のエピソードが記載され読み物としても大変面白く、研究者が絶えません。残念かな不慣れな名前の神々が次々に登場し閉口しますが、彼等は身近にいる蛇や昆虫や山や森に川に海に全ての自然が「神」としての対象でした。

(二) 海の神は大綿津見神(おおわたつみのかみ)

天神であるイザナギの命が黄泉(よみ)の国から帰り禊(みそぎ)の上に生まれたのが大綿津見神であります。記紀により違いますが、上津(うわつ)中津(なかつ)底津(そこつ)綿津見神の三神は古事記に登場し、上津・中津・底津=少童命(つのおのみこと)は日本書紀の三神です。この地上に最初に現れたのは、これらの海(水)の神さまであります。中国の江南から来た水耕稲作文化の弥生人の残像と思えます。当時は海のことを「わた」と称していました。文字が入ってきて古事記を作るとき漢字を綿津見と当てたのです。今も玉野に和田の地名が残っています。神戸の和田岬もそうです。この地が古くからの海辺であったことが伺える証でしょうか。玉野の沖の喜兵衛島で製塩用の師楽(しらく)式土器が大量に発見され製塩業が盛んであったことを示しています。

海中の竜宮様は海神・龍神として祀られますが、海の岩礁付近は貝や海藻が豊富に採れ食材として貴重なものでした。山神の岩座(いわくら)と同じように海の岩礁は神の依り代として大切な水の神(龍神)であり、漁労の神である夷(恵比寿)さんとして祀られます。農業の水の神は稲荷さんとして進化発展をして今日があります。中国の道教の教えも含めて八大竜王の形で、今も多くの信者が信仰の対象になっています。

一方航海の神は船を守る船神として信仰され、住吉神社・熊野神社・四国の金毘羅さん、福岡県の沖にある小さいけれど有名な志賀島に祀られる志賀海神社や宗像神社。それらの海神を統括する綿津見神はその一族を束ねる安曇連(あずみのむらじ)であります。ヤマトの初期国家形成に重要な役割を果たします。これらの神々は何を意味するのでしょうか。

山の尾根は天(あま)の神に一番近い存在です。麓に住む弥生人は日の昇る聖なる山に礼拝しました。日本の山は森と林で成り立ちます。山には木が育ち林から森になります。山は男神で木は女神です。特に美しい山桜は女神の代表として今に伝わっています。大木から舟が作られ、その船は漁労者や航海者にとっては命を守る大切なものです。海神の存在は今も生きています。

記紀の世界では天上神である伊邪那岐命(いざなぎのみこと)が死の国である黄泉(よみ)の国から帰り禊(みそぎ)をして生まれたのが綿津見神と先にも申し上げました。その場所は筑紫国糟屋郡志賀島であり魏志倭人伝によると、弥生末期今の中国から「金印」をもらったことになっていますが、その金印が江戸時代にこの島から発見されたのです。偶然の一致でしょうか、私はそうとは思いません。海を支配する一族がこの島にいたのです。記紀ではその後、神功(じんぐう)皇后の三韓征伐の拠点ここに置き、海を支配していた綿津見神の祭司者である安(阿)曇連(あづみむらじ)一族の力を借りて征伐を成功させました。その子の応仁天皇はこの地より難波を目指します。そして日本の国体の基を造りました。古墳時代に日本固有の文化が発達します。そして有史時代(律令時代)に入っていきます。正史ではこの時期中国大陸との交流について詳しくは触れていません。

(三) 海人安曇族=倭族の活躍

日本先史古代研究会の平成24年5月27日の講演会で、矢吹壽年氏に先史時代の東南アジアから東アジアのことを詳しく教えて頂きました。誠に含蓄のある内容で素人の私等にも大いに参考になりました。中でも東シナ海と朝鮮半島・日本列島には共通の言葉を持った倭族の存在があり当時を知る上で大切なポイントと想い共鳴できます。

東アジアの中で、大陸の遊牧民族から定住型の牧畜農耕をする、今の北京を中心とする中華思想を育んだ民族がありました。それとは別の生き方をしたモンゴロイド人が、陸伝いではなく、海伝いに南インドから江南地方を経て朝鮮半島そして九州島を中心とする、出雲、吉備を一括した文化が存在したと思います。矢吹氏は言葉も共通していると論証なさっていました。これらの地域に共通しその代表格は水耕稲作であります。学者によってはこれらの集団を「倭族」と称しています。当時倭族と言ったかどうかはわかりませんが、同じ言語で風俗も同じであれば国境のない時代です、海人の航海技術を駆使すれば交流は容易であります。

今も昔も変らないものに大陸の沖を北上する親潮があります。対馬海流に乗ればこれらの海域を制することは可能でした。その上親潮以上の強い潮汐(ちょうせき)流(潮の満ち引き)の渦を利用すれば親潮を逆らった航海も可能でした。(日本海に入ると殆ど潮汐はありません)先にも述べました志賀島を拠点とする倭族の長(おさ)が安曇族であり日本の国体を造るまでの間、大きな集団であったと想定します。彼等は今の商人いやもっと大規模な大手商社であり、航海技術(天体に関する知識・海流潮汐に関する等の総合知識)を有し、日本列島の稲(米)を朝鮮半島の銅・鉄の原料と交易します。

列島内では初期の水耕稲作は土木技術のレベルが未熟なために、水の管理のしやすい川の上流で発達します。主食が穀物に変化しますと、塩分が不足します。海産物(製塩も含む)されたものの交易もこれらの海人が担当しました。物資の交易だけではなく、各地の情報も運びます。弥生人は農耕民族です。交易や情報はこれらの海人族から得ていたのです。彼等に教わった農地の適地に移動しながら日本列島に拡散してまいります。日本列島を約500年間で世界的視野に立ってみても、これだけ良質な穀物である稲の栽培技術を広めたのは、当時の海人が単なる漁労者ではなく、大陸間の航海技術を駆使し、内陸部にあっては河川を利用した広範囲な交流があり、その交易で大きな集団を形成していました。その水先案内人パイロット役をしたのが海人族=倭族=安曇族なのです。

(四) 日本列島内陸部の安曇族

何度も申し上げていますが初期の水耕稲作は農業土木の技術がありません。水を管理するのは豊富な水量のある川の周辺での小区画の田圃です。その方が水の管理がしやすいのです。安曇族の案内で農耕の適地に移住した弥生人は、連れてきてくれた彼らを尊敬し拝みます。この神様(水神)はこの場合海の神様ではありません。連れてきてくれた安曇族＝海人族＝倭族を「神」と祀ったものが地名や神社の名前として内陸部に残ります。

私の知る限りでは昨年NHKの朝ドラで有名になった、長野松本盆地の安曇野(あづみの)が有名で、ここは単なる集落ではなく松本市の中に安曇野盆地があり九州北部の地名に酷似した地名や神社が多く残っています。一見筑前地方から大量に移住したかのようにですがそうではありません。テレビでも拝見しましたが今でも梓川(犀川)には豊富な水が、安曇野盆地を潤しています。

琵琶湖の安曇川(あどかわ)も有名ですし、山陰の米子に安曇(あづま)があり、当然博多湾の志賀島の神社の宮司は今でも阿曇氏です。血族としての氏族だけではなく、特殊技能を持ち誰にでも出来ない、造船・航海・操船・漁労・製塩・交易全てに通じていた集団が安曇族であり、彼等の存在が有って、弥生の文化が短期間に発達し、日本固有の古墳時代をへて律令体制(国家形成)へと連なって発展してまいります。

八世紀の律令の役人もこれらの海人族の活躍の恩恵を無視することは出来ません。自分たち支配者の出自は大陸系天神族の末裔であっても、海神＝綿津見神の孫である神武天皇を天皇制のTOPに祭りあげているのです。安曇族の一員として吉備の海人も活躍します。

(五) 安曇族(海人族)今に伝えるもの

少し堅い話が続きました。視点を替えて今から約2500年の昔に南インド・中国の江南地方から稲(米)が倭人族(海人族)によって、伝わったことは何度も触れましたが、それは今日我々の主食として重要な農産物だからであります。その他にも副食品に類するものが伝わり生き残っているのです。それらの概要をお伝えいたします。

海人族の他の一面は漁労であります。漁労は縄文時代にも既に行っていました。主に河川を遡上する鮭とか鱒の漁であります。これは今日アイヌに伝承され神格化しています。熊と鮭鱒漁はアイヌに特化されたように生き続けています。

海人族が伝えたのは鵜飼漁であり、食材としてはお茶や棗(ナツメ)真竹類があります。筍(たけのこ)は江戸時代に中国から伝来した孟宗竹が今では主力ですが、真竹はこの時期に入り自生したのです。竹は稲の仲間であります。稲が飢饉の折に竹は一斉に実を付けます。その実は米の代用食になったそうです。実を付けた竹は枯れてしまいます。屋敷の周りに竹藪を設けているのはこうした先人の知恵なのです。棗は今日お茶の道具の一つとしての方が身近です。でも我々の子供の頃はオヤツ代わりに食べていました。リンゴの味に似ていたことを覚えています。お茶は禅宗とともに修養・教養として今日に続いています。当時は薬用として東アジアに普及していました。

さて海人族の一面は漁労です。主に海での漁労は魏志倭人伝でも伝えているように顔面に刺青をして潜水し魚を採る自国の江南地方と同じであると伝えています。倭国(邪馬台国)は今の台湾の東方に存在すと考えていたようですが、それはともかく当時海の中で動き回る魚を捕獲するのは大変でした。潜水しても人間の裸眼では視界が利かないのです。箱メガネは明治20年代のことで、最近のことなのです。魚網の発達は後のことで、当時は浅瀬に潜り貝や海草を採取していました。潜水して魚を捕れない人間は知恵を働かせます。それが鵜飼なのです。鳥類はえさを啜えたり、飲み込んで雛に給餌します。中でも鵜は水中(海

中)の潜水が得意で、同時に沢山の魚を捕らえ生きた状態で吐き出します。この特性を見ていたのです。水耕稲作を行うものは農閑期があります。水辺で潜水し魚を上手にとるこの鵜を飼育し始めます。中国の江南地方が鵜飼漁の始まりとの説が有力です。

古事記の大国主命の国譲りの段にも鵜が登場します。

「櫛八玉神(くしやたまのかみ)が鵜に姿を変えて海に潜り、海底の土で器を作り
それに魚を盛って大国主神にささげた」

との話です。鵜の話はその他にも記紀に登場します。それだけ鵜が人間に身近な存在で関わりが多かったのでしょう。現在の日本での鵜飼は海鵜を飼育して使っていますが、中国では川鵜を使い紐は使いません。日本では清流で流れの早い川で、鮎の鵜飼が主ですから紐で操っているのだそうです。ともあれこの漁法は特殊な形で伝承されています。今でも宮内庁の管轄になっていると聴きました。

鵜以外の漁はどうしていたのでしょうか。隠岐海士町に伝統漁法として「カナギ」と称する漁法が残っていて、小舟の上から覗き、ヤリやモリで覗突(みつ)き漁を行っているのですが浅瀬で貝類や海草を採る程度です。残念かな人間の裸眼では海面から水中は曇ってしまっていて見えません。そこで登場するのが貝の一種である、アワビ＝鮑・鰩・蛸・鰩・鮑の内臓(ハラワタ)を干しそれを炒めてから、細く刻みます。そのものを「ナキワタ」と称しますが、それを口に含んで海面に吹き付けると、一瞬海面が澄んだ状態になり海底のアワビやサザエなどを確認し採取しました。近代まで続いた漁法であります。

アワビは生食としての食材は勿論ですが加工品にし、内蔵は先に申し上げたカナギとして活用します。殻は螺鈿(らでん)細工として最近まで身近なボタンに加工されていました。サザエもほぼ同じ使い方をしますが古代は違った面がありました。アワビは加工した上で、税の一種である「調」として納められていたのです。今日の熨斗(のし)鮑(アワビ)＝長鮑(のし)として今日も続けられています。その昔(今でも)神饌(しんせん)として、鰩(かつお)や若布(わかめ)と共に三種の神饌に入る重要なお供え物なのです。その他にお供えとしては塩・鮭・鯛・烏賊(いか)などの季節の海産物が神へお供えされます。そのお供え物を神様から戴くのが神下(みさげ)で「みやげ」になり土産と表記しているのです。神様に供えたと神様は一瞬のうちに頂かれます。新鮮なうちに神下(みさげ)されたものを我々下々は有り難く頂戴し宴席を設けます。

酒肴(しゅこう)の席で頂くその「酒」は穀物の代表格であり、肴(さかな)は酒菜(さかな)とも申しまして副食物の総称であります。酒菜(さかな)の「な」は魚と同意語で海産物の総称だそうです。これらは漁労と農耕が平行して行われ、中でも日本列島では加工食や発酵食として、古代でも産地から都市部に運ばれ貴重な食材であり、現在にも受け継がれているのです。

熨斗鰩(のしあわび)は現在も伊勢神宮に献上され、作業工程から献上までの一連の行事は三重県の重要無形文化財に指定され今に伝わっています。簡単に製法を述べておきます。

アワビの生肉(殻や臓物を取り除いたもの)を、干瓢(かんぴょう)を剥ぐように小刀(熨斗鎌)で薄く細長く条状(すじじょう)に剥ぎ、干し場に並んだ竿に掛けて干し、生乾きの時に竹筒を転がして引き伸ばし適当な寸法と形に整える。

この干鰩(ほしあわび)は、今日でも最高の贈答品で中世から始まった伊勢神宮だけでなく神社への供祭物(ぐさいもつ)も最高の祝品であります。

先史時代の約2500年の昔の生活が飛躍的に発展したのは、東アジアをまたに掛けて活躍した海人族＝倭族＝安曇族の存在が大きな役割を果たしました。今日我々の生活の隅々に、生き残っていることを学びました。そうした技術・伝統・風習の文化を大切に引き継ぎ後世に残したいものです。

大嘗祭の沿革について

日本先史古代研究会会員 井上秀男

(1)歴史の中の大嘗祭

日本は古代から稲作を栽培し農耕文化を中心として、社会が発展して人口も増加し人々の生活が営まれて来た。稲作には水田への水の恵み、太陽の恵みを受けることが必要である。雨の降らない時には雨乞いをして雨の恵みを古代人は神に祈った。山や巨石を神体として拝み稲の収穫を祈った。人々の心が農耕儀礼にと推移していったと思われる。

私は以前NHKの番組放送で石川県能登半島の奥能登地方での昔から行われている民俗行事で「アエノコト」という田の神を家の戸主が苗代田に迎えに行き神を家に招いて戸主と神(田の神)との直会(なおらい)(神祭の後で行う酒食を称するが、本来は神との共食儀礼、もしくは神祭りに伴う齋食儀礼を称したもの)をして収穫の感謝と来年の豊作を祈る素朴な民俗行事を取材し放送していたのを覚えています。この民俗行事は昭和51年(1976)6月に国の重要無形文化財の指定を受けている。能登地方の小さな山村における収穫祭で新嘗祭(にいなめさい)と共通している。嘗(な)めるは、口で味わうと云う意味で新嘗祭は、その年に収穫された新穀を神に供え、次いで人も食する祭りとされている。大嘗祭はその時天皇が即位された最初に挙げる大規模な新嘗祭の事としている。

この様に稲の収穫祭は宮廷儀礼の新嘗祭(にいなめさい)又は大嘗祭(だいじょうさい)と共通していると考えられる。日本書紀の仁徳天皇期40年の頃には新嘗を「にわのあい」と訓じ、日本紀私記(にほんぎしき)の神代には「にいのあい」と訓じられている。宮廷儀礼といわれている大嘗祭の儀礼が史料として明確に見えるのは平安時代になってから第40代天武天皇2年(673)に始まったとされ、天皇御一代にとっては重要な大礼、大祀である。延喜式には踐祚大嘗祭、踐祚大嘗会と記されていて、即位の儀礼で「令義解」(りょうのぎげ)という著には天皇の即位を踐祚(せんそ)というたと記してある。平安末期になってから大嘗祭から即位式は、切り離され神器の授与が即位式の方へ移された。第85代仲恭天皇は順徳天皇の皇子として建保6年(1218)10月10日に誕生されている。祖父の後鳥羽上皇の意見も有って仲恭天皇の立太子が挙行され承久3年(1221)4月父の順徳天皇は退位し、仲恭天皇が4歳で踐祚する。この頃後鳥羽上皇と鎌倉幕府の北条義時との関係が悪くなって、後鳥羽上皇は北面の武士の他西面の武士を召抱え討幕の計画を進めて承久3年(1221)5月北条義時追討の院宣が下された。しかし北条義時の子の北条泰時の軍勢によって京都に攻め込まれ後鳥羽上皇は敗北して隠岐へ、順徳天皇は佐渡へ土御門上皇は土佐へと流される結果となる。俗に承久の乱である。この承久の乱によって仲恭天皇は大嘗の儀を行うこともなく退位され天皇として認められず半帝(はんてい)と言われた。大嘗祭が朝廷の祭儀として確立して以来の出来事であった。

室町時代の応仁の乱(1467)の起こる前年の文正元年(1446)に第103代後土御門天皇が23歳で大嘗祭が挙行され、在位36年間に及んだが翌年応仁の乱が起きて、後土御門天皇の大嘗祭を最後として長い間、大嘗祭は中断された。応仁の乱は斯波(しば)家と畠山家の相続問題が起こっていた守護大名の跡取りは將軍の許しを得て決めることになっていたので守護大名は幕府の有力者を頼って立場を有利にしようと考えていた。この頃足利將軍家でも後継者の問題が起きていて、当時の権力者であった細川勝元と山名持豊がそれぞれ一方を支持して対立したことが応仁の乱の起因となった。

(2) 応仁の乱後の大嘗祭

第103代御土御門天皇の大嘗祭を最後として江戸時代の東山天皇の即位にあたって貞享4年(1687)8月13日大嘗会が簡略な形で復興されるまでの240年間大嘗祭が中断されていた。第113代東山天皇の次の中御門天皇の時は大嘗祭は举行されなかった。その次の第115代桜町天皇の元文3年(1738)11月1日、8代将軍徳川吉宗の積極的な支援によって大嘗祭の費用として幕府から下された御下行米(ごげぎょうまい)は前回より千石増加されたことが鈴鹿家文書の元文3年の大嘗会御下行帳に見える。第117代後桜町天皇(女帝)は桜町天皇の第二皇女である。弟の桃園天皇が宝暦12年(1762)7月12日に崩御された時、皇嗣の英仁親王はわずか5歳であったので公卿達が協議して皇子誕生までの中継ぎとして皇位に就かれた。第109代明正(めいしょう)天皇(女帝)居たことを例にならって英仁親王が成長されるまで皇位につくことになった。宝暦12年(1762)7月27日踐祚翌13年11月27日即位式を挙げたのである。時に24歳であった。江戸時代二人目の女帝である。

その後明治になって明治4年(1871)大嘗会は東京の皇居吹上御苑を祭場とされた。明治42年2月11日に即位礼、大嘗祭の典範として登極令が皇室第一号をもって公布されている。本文は18ヶ条で附式は第一編は踐祚一式、第二編は即位礼及び大嘗祭一式にわかれ32項から成っている。大嘗祭は大正4年、昭和3年、平成2年11月22日現在の天皇の大嘗祭が举行されている。

宮廷儀礼の大嘗祭も激動の時代の流れの中を伝統的な儀礼として伝えてきていると考えられる。

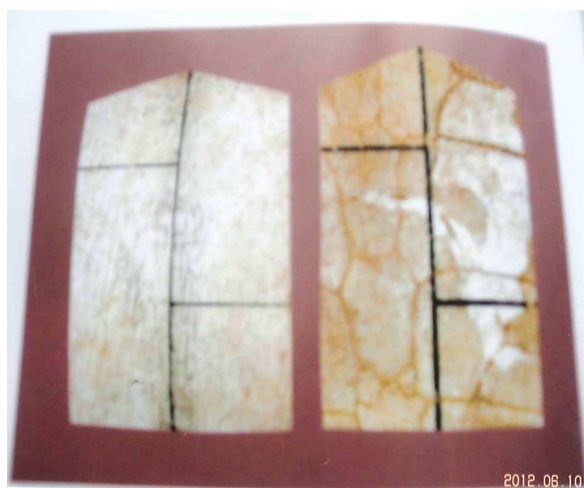
(3) 鈴鹿家文書と大嘗祭の儀礼

鈴鹿家は江戸時代の貞享4年(1687)第113代東山天皇の大嘗祭から幕末まで神祇官として奉仕していた関係で大嘗祭の祭儀の詳細な記録史料を保管されていたのである。神祇官とは律令制の二官の一つで天神地祇の祭祀を執行し諸国の官社を総管しその祝部の名帳と神戸の戸籍を掌るなど神祇行政の全般を官掌した中央管庁の職である。

高鴨神社(奈良県御所市)の官司鈴鹿冬三氏蔵の大嘗祭に関係した資料を鳥越憲三郎氏に鈴鹿冬三氏が託された。その後鈴鹿家文書史料を参考にして鳥越憲三郎著の「大嘗祭」1990年6月30日初版発行。又有坂隆道氏、島田竜雄氏と共編著で「大嘗祭史料」鈴鹿家文書・柏書房刊平成2年1月に刊行されている。今回この寄稿文を書くのに大嘗祭の本を拝読し文面で参考にさせていただいた。

大嘗祭を举行する場合に先立つ儀礼として国郡卜定(こくぐんぼくじょう)が行われ、その年の悠紀(ゆき)主基(すき)にあたる国郡を卜部(うらべ)が亀甲を灼(や)いて占いを定めることである。

下の写真を参照



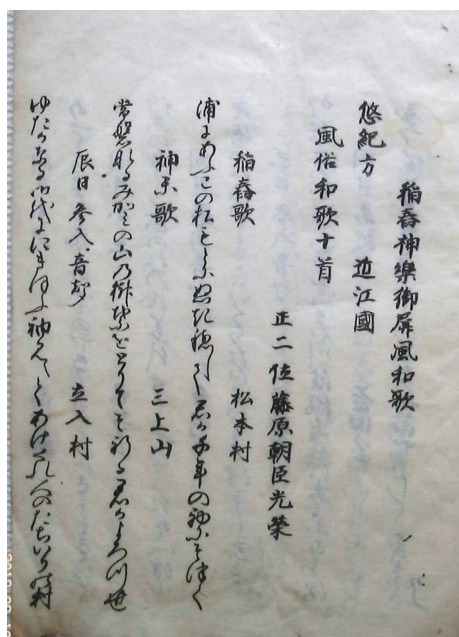
米の収穫時に悠紀主基の両国へ抜穂使(ぬきほし)が使わされて斎田(さいでん)の米・粟で大嘗祭の儀式に用いる黒酒・白酒・御飯・御粥(おかゆ)を作るのである。卜定(ぼくじょう)で亀甲を灼くのは後のことで古くは太占(ふとまに)といって牡鹿(おじか)の肩骨を灼いて占っていたことが日本書紀古事記に記されている。その他の儀礼として荒見川祓(あらみがわはらえ)は大嘗祭に奉仕する太政官の弁(べん)・史(し)などの穢れを祓う儀式。小忌卜定(おみぼくじょう)は小忌衣(おみごろも)を着て奉仕する者を選ぶ儀礼で小忌衣は狩衣(かりぎぬ)に似ており白麻に青摺りの花鳥などの文様を付けたもので平安初期の嵯峨天皇のとき神事服として定められたとしている。御禊(ごけい)の儀礼は天皇の身の穢れを祓う儀礼としてある。忌火御飯(いんびのおんい)は内膳司が忌火で炊いた御飯や調理したものを天皇が食される儀式である。由奉幣(よしのほうへい)の儀礼は大嘗祭を行うことを、伊勢・石清水・加茂の三社へ勅使を遣わせて奉幣される儀式である。

大嘗祭が举行されるまでの一つ一つの儀礼について、それぞれの意味と歴史があると感じています。

(4)大嘗祭和歌について

大嘗会(だいじょうえ)和歌には風俗和歌と御屏風和歌の別がある。大嘗会には古来から和歌が詠進されている。大嘗会和歌といわれ「古今集」巻20には五首入集し、その中に仁明天皇天長10年(833)度、主基方の「真金吹く吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけき」という和歌があり古いといわれている。この和歌は備中が大嘗祭の時に主基方として選ばれた時の和歌と思われる。

この時の悠紀(ゆき)方は近江国高島郡で、主基(すき)方は備中国下道郡と記されている。これより以前は岡山県内での主基方として文献に見えるのは桓武天皇の天応元年(781)備前国、次に平城天皇の大同3年(808)、次に嵯峨天皇の弘仁元年(810)美作国と仁明天皇の天長10年(833)の備中国と年代の古い順に主基方として見える。大嘗祭和歌集として村上天皇の天慶9年(946)主基方の備中国風俗神歌として、土地の名所の地名を選んで藤戸、いはや山、玉田野、備中中山の地名を入れた風俗歌が詠じられている。昔から県内の備前・備中・美作が大嘗祭に際して主基方として、その都度卜部が亀で占いの上で選ばれている。

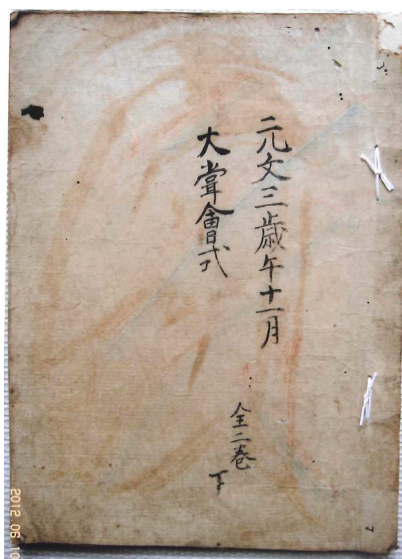


元文3年(1738)悠紀方(近江国)の地名を詠んだ和歌

悠紀主基の両国から献上された屏風が悠紀の帳、主基の帳として、辰巳の両日に紫宸殿に飾られる。その屏風には屏風歌十八首が色紙に書かれ、六枚折り三双の屏風に貼られる。両国の名所を選んだ地名が「悠紀所風土記・主基所風土記」として10月上旬に行事弁のもとに届けられる。その風土記は悠紀・主基それぞれの歌作者に渡され、作者はその中から適当な地名を選んで屏風歌十八首を詠進する。このように大嘗祭会和歌にも順序があつてそれに従つて進行された。元文3年の桜町天皇の場合は10月9日に風土記が弁のもとに、11月1日に悠紀の歌は烏丸前大納言光榮卿、主基の歌は日野大納言資時卿によつて詠進された。それを持明院基雄卿が清書し、さらに土佐大蔵少輔光芳によつて和歌に見合う絵が画かれ、その絵の上に和歌を書いた色紙が貼られた。風俗和歌については悠紀、主基の風俗歌十首が前記の人達によつて詠進される。その風俗歌は行事弁から楽所に届けられ曲譜が付けられ、そして辰巳の両日、悠紀主基二国の国司に率いられた人達によつて歌舞される。

(5) 元文3年(1738)大嘗会写本に関して

今から22年も前になる平成2年11月と記憶している。現在の天皇の大嘗祭が挙行された時である。我が家の郷土資料を整理していたら和紙で42枚に書かれた一冊の和本が目にとまった。表紙には「元文3年11月大嘗会式全二卷下」と書いてあつた。後日図書館で調べてみると、江戸時代の第115代桜町天皇の大嘗会の挙行された元文3年(1738)11月1日の大嘗会の記録の写本であることが判明した。写本の内容は、前半は天皇に献上する米の産地悠紀(ゆき)主基(すき)の両国の地名を読み込んだ屏風和歌が記されており、後半は大嘗祭に携わつていたと思われる公家(くげ)の日記の写しで祭儀のやり方や用意する道具類、服装等についての記録が書かれているものです。上巻が欠巻となっているのが残念ですが、時々古本屋等で探すこともありますが中々見当たりません。昨年自宅が台風の影響にあつて蒐集資料や本類を友人の倉庫へ移して保管しているのですが、最近整理をしていたらダンボール箱から大嘗祭の資料が出てきたので、今回の“きび考”の寄稿文に取り上げて見た次第です。



第15代桜町天皇の大嘗会の写本
井上秀男氏蔵

- 参考文献
- 大嘗祭(鳥越憲三郎著)
 - 大嘗祭の研究(岡田精司編)
 - 大嘗祭史料 鈴鹿家文書

連載 四国八十八ヵ所めぐり「歩き遍路の旅」4

日本先史古代研究会 会員 樋口俊介

発心の道場(阿波の国) その4

「1番(霊山寺)～23番(薬王寺)」合計23ヶ寺(徳島県)

発心(ほっしん)とは、四国霊場巡拝を志すこと。はるか彼方に向かって
1200Kmあまりの辺路(へち)の旅へ、皆様をご案内いたします。
当日に歩くお寺に関する由来とか伝説等の内容を分かる範囲で説明をします。
これからが修行のスタートです。必ず最後まで歩き通します。

第7回目=平成20年11月08日(土)眉山の麓、徳島の町を歩く

歩き(ウォーキング)遍路 札所1ヵ所 約22Km

18番(母養山) 恩山寺

所在地=徳島県 小松島市田野町恩山寺谷40

電話=(0885)33-1218

宗派=高野山真言宗
開基=行基
本尊=薬師如来

○行基が厄除けのために薬師如来を本尊として刻み、災厄を除く道場としていた。境内にある地蔵堂には等身大の地蔵像と、小さな地蔵像が数多く並んでいる。大師堂には、大師から自らが刻まれた自像が安置されている。聖武天皇の勅願寺で行基が開山した古刹。

◎薬師如来について 人間の病苦を癒し心の苦悩、厄を取り除くなど12の誓願を表わす如来で四国霊場にはいちばん多くまつられてる。

筆者紀行

17番から歩いて20Kmを6時間20分(途中に4回休憩を含む)で到着する。徳島県では午前中は雨が降ったので歩き遍路には大変でした、雨は夕方も降りました。丘陵を上り、豊かな緑の札所にたどり着く、弘法大師が自ら植えたと言われる見事なびらん樹が、仁王門の少しおくにある。このお寺はもともとは女人禁制で、人々の災厄を除く道場だった。そのため、昔、このお寺で修行をしていた弘法大師のもとへ、大師の母君が訪ねてきたが、女人禁制のため会えなかった。しかし大師は母のために女人解禁の修行をおこない、やがて母君は剃髪してその髪を納められたので、大師は寺号を「母養山」と改めたそうだ。

なんと母親思いのお大師なのだろうと、感激し感動します。今日ほとにかく約20Kmを7時間(昼食、休憩を含む)くらい歩き両足には豆ができ、膝が痛く大変に疲れました。しかしその日その日に目的地へ着くためには、目の前の一步の歩みを進めることだけが、唯一の方法です。そうして辿りつく一日のゴールです。

お遍路の旅は、そんな小さな達成感の積み重ねで、疲れも痛さも吹っ飛び爽やかな気分になります。16時20分に終わり16時30分にバスに乗り岡山へ林原駐車場20時20分着く、なお本日の歩数31003歩

第8回目=平成20年12月06日(土)小松島から山へ向かう

歩き(ウォーキング)遍路 札所1ヵ所 約14Km

19番(橋池山) 立江寺

所在地＝徳島県小松島市立江町若松 13

電話＝(0885)37-1019

宗派＝高野山真言宗
開基＝弘法大師
本尊＝延命地蔵菩薩

○四国霊場には四つの関所寺があり、そのひとつが立江寺。心がけの悪い者は山門から先には進めないどころか、天罰が下るといふ。本尊は安産の地蔵尊として、広く信仰を集めている。「子安の地蔵」や「立江の地蔵さん」と呼ばれ、安産祈願の寺として信仰を集める。境内には多くの桜が植えられ、花見時には花見客でもにぎわうそうです。

◎(延命)地蔵菩薩について 弥勒菩薩が出現するまでの間、生前の因業に寄って、天上から地獄まで六つの世界に分けられる衆生を救済するという。

筆者紀行

18番から歩いて4.8Kmを約1時間10分(途中休憩含む)で到着する。国道55号をそれて山間の県道を歩く、釈迦庵が途中にある。ゆるやかな峠を越えてしばらくするとお京塚を見つける事ができる。これは立江寺と関係の深い塚だ。しばらく歩くと「白鷺橋」という赤い橋があった。この橋も、立江寺の伝説と関係の深い橋なのだ。立江寺はお堂建立の際、どこからか飛んできた白鷺が橋の上に止まり、建立の場所を示したといわれている。なお、関所寺については立江寺の外に、27番(神峰寺)、60番(横峰寺)、66番(雲辺寺)です。さあ20番(鶴林寺)へは13.8Kmで厳しい山道、道中はかつては遍路ころがしと呼ばれる難所に向け歩き出す、さすがに不安であるが同時に、新たに気持ちを引き締めて楽しく行くぞ！生名まで歩く。

17時10分に終わり17時20分にバスに乗り一路岡山へ林原駐車場に20時20分到着した。

なお、この日は特に寒く山間部で歩きの途中では、綿雪が舞いました。本日の歩数28,055歩でした。

第9回目＝平成21年01月24日(土)鶴と龍を目指して深山幽山の道を行く

歩き(ウォーキング)遍路 札所2ヵ所 約15Km

20番(霊鷲山) 鶴林寺

所在地＝徳島県勝浦郡勝浦町生名鷲ヶ尾 14

電話＝(0885)42-3020

宗派＝高野山真言宗
開基＝弘法大師
本尊＝地蔵菩薩

○弘法大師がこの寺をおとずれ修行していると、2羽の鶴が黄金の地蔵菩薩を互いに守っていた。ただちに高さ1m程の地蔵菩薩を刻んで、金の尊像をその胎内に納めて本尊とした。いろいろな場所に鶴の意匠が施されている。深山にたたずむ古刹。難所ゆえに兵火を逃れ、文化財が多く残る。老樹に包まれる山門の仁王像は、運慶作と伝えられる。

◎地蔵菩薩について 前記に説明の通り

筆者紀行

本日は前回に歩き終えた生名から20番(鶴林寺)、21番(太龍寺)をお参りして黒河までの15Kmを歩く予定です。参加者は33名(スタッフ等を含む)バスで林原駐車場を6.25分に出て生名に10.10分に着き、10.20分から歩き出す。地元の人やお遍路さんには「お鶴」「お鶴さん」などと、可愛い名前では呼ばれているお寺だが、可愛いのは名前だけ。四国八十八ヵ所札所めぐりの3難所寺のひとつで、急な山道を登り、標高570m

の山頂にお寺があるのです。とにかく大変ですが登ってみての爽快感はたまりません。

鶴林寺には「千枚通し」という、水に溶ける紙のお札が1000円で売られている。修行を積んでいる人が1000日間欠かさず、千枚通しの紙を水に溶かして飲むと願いが叶うのだそうです。お寺の方いわく、「修行をしていない普通の人が飲んでも効果がありません」とのこと。鶴林寺でお参りを済ませ次は難所で険しい山道の上りあり下りありの太龍寺に向かう！！ さあ気を引き締めて頑張ります。14時10分に出発する。

21番(舎心山) 太龍寺

所在地＝徳島県阿南市加茂町龍山2

電話＝(0884)62-2021

宗派＝高野山真言宗
開基＝弘法大師
本尊＝虚空菩薩

○垣武天皇の勅願により開かれた寺。若き日の大師が100日間に渡り修行をし、虚空蔵求聞持法を修めたといわれている。「西の高野山」と呼ばれる阿波屈指の名刹で、広大な伽藍のなかには、本堂、大師堂、多宝塔などが立ち並ぶ。求聞持堂では虚空蔵菩薩の真言を一日1万回以上唱える荒行が現在も行われるという。

◎虚空菩薩について

大地と慈悲の地蔵菩薩と並んで信仰があつい。福と地を無限に持ち、空と智慧を象徴する菩薩として信仰される。

筆者紀行

21番札所「太龍寺」への巡拝はさらに厳しい山道が続く。那賀川を渡り、小川に沿ったゆるやかな坂道が続くが、後半は厳しい上り坂だ。標高600mの太龍寺山の山頂にあり、鶴林寺から歩くと6.5Km なのだが非常に険しい山道なので、休み休み行くので時間がかかります。鶴林寺までせっかく山を登ったのに、今度は下がってまた上らなければいけない。しかし行けどもまったく到着する様子がない。上がっても上がっても石段がある感じで、太龍寺はお遍路さんにとって12番(焼山寺)、20番(鶴林寺)に続く「阿波の三大難所」だというのを実感する。したがって今日は登って下って山を2つ越えたという事です。そのため足には豆ができ、膝ががくがく大変に疲れました。しかし達成感があり気分が爽やかです、有り難うございました。

17時10分に終わりバスで岡山へ林原駐車場に21時20分に到着。本日の歩数は22937歩でした。



第 10 回目＝平成21年02月14日(土)厳冬の阿南市郊外を歩く

歩き(ウォーキング)遍路 札所1ヵ所 約15Km

22番(白水山) 平等寺

所在地=徳島県阿南市新野町秋山 177

電話=(0884)36-3522

宗派=高野山真言宗 開基=弘法大師 本尊=薬師如来

○修行する弘法大師の前に、五色の霊雲がたなびき、その中に金色の梵字があらわれ薬師如来に姿を変えた。そこで大師が加持水を求め杖で掘ると、乳白色の水が湧き出したことから、山号を「白水山」とつけたとか。

◎薬師如来について

前記に説明の通り

筆者紀行

本日もバスで林原駐車場を6.40分に出発し、途中で津田の松原SAで休憩し、前回歩き終えた太龍寺の近くに行くために、バスで行けないのでロープウェイに乗り下車してそこから歩き始める。前日の雨で濡れていた太龍寺から平等寺への下りはすべりやすく、力が入り疲れしました。ずっと街中や山の中を歩いてきた徳島の遍路道でしたが、由岐という町に来て初めて海に出会いました。次のステージ高知が近づいています。

アップダウンが激しくてきつい道も多かった徳島ですが、人の温かさに支えられて歩くことが出来ました。阿瀬比を通過し大根峠を登り下って竹藪を通り、どっしりとした仁王門の前に立つと、本堂に続く石段が見える。無事、平等寺に到着。平等寺には井戸があり、今も水が湧き出ている。なんでもこの水は、万病に効く「弘法の霊水」だそうで、さっそく飲んでみる。なんか元気になってきた気がする。納経を済ませて、平等寺をあとにして月夜橋の付近まで歩く。17時10分に終わりバスで岡山へ林原駐車場に21時30分に着く。

あと我が家へ、なお、今日の歩数は29,469歩でした。

第11回目=平成21年03月07日(土)山中の庵から紺碧の海へ向かう

歩き(ウォーキング)遍路 札所1ヵ所 約14Km

23番(医王山) 薬王寺

所在地=徳島県海部郡日和佐町奥河内寺前 285-1

電話=(0864)77-0023

宗派=高野山真言宗 開基=行基 本尊=薬師如来

○文治4年に火災が起きた際、本尊の薬師如来が飛び去って、火災をまぬがれたという。その後、伽藍を再建して新しい薬師如来を安置すると、飛んでいった薬師如来が新しい像の後ろに背中合わせに戻ってきたという伝説がある。日和佐の海を望む山の中腹にある。厄除けに霊験あらたかな寺として有名で、境内には33段の女厄坂、42段の男厄坂がある。一つひとつの石段には厄除け祈願の1円玉が置かれている。

◎薬師如来について

前記に説明の通り

筆者紀行

阿波の国では最後の23番に、バス(参加者36名「先達さん等を含む」)にて岡山林原駐車場を6.45分に出発する。途中で今日も津田松原SAでトイレ休憩をして、前回歩き終えた月夜御水庵まで行き下車して、準備を済ませ10時50分から歩き出す、釘打トンネルを抜け福井ダムで弁当(昼食)を食べる。この近くには番

外の霊場で弥谷観音がある。星越峠を歩き薬王寺へ向かう山の中腹にそびえる印象的な塔が迎えてくれる。

阿波発心の道場最後の札所だ。大きなわらじが奉納された山門をくぐり、階段を上りきったところに、本堂があり、本尊は2体あったが、秘仏ゆえ、見ることは出来ず。残念！！ここは厄除けの寺としても有名。境内には、自分の歳の数だけ打って厄よけ祈願する厄災消除の鐘もあった。この薬王寺で、徳島県23カ所「発心の道場」を巡り終えることになる。17時30分に終わりバスで岡山へ林原駐車場に21時40分に到着。

なお、本日の歩数は31,957歩でした。徳島県23カ所「発心の道場」の歩き総距離は約163Km。
さあ次は、修行の道場(土佐の国)「24番(最御崎寺)～39番(延光寺)合計16ヶ寺(高知県)へ



【参考文献】「四国八十八ヶ所めぐり、お大師さんで行く遍路⑩コース(昭文社)

「ふらりおへんろ旅—空海と仏像に会いに行く！—(KK 西日本出版社)

「四国遍路に行ってきたマッシュ！(KK PHP 研究所)

编者より この連載はまだまだ続きます。次回から土佐高知県に入ります。お楽しみに！！

★2回目に(次回より掲載)

○修行の道場(土佐の国)「24番(最御崎寺)～39番(延光寺)合計16ヶ寺(高知県)

海を眺め、空を仰ぎ、ひたすら前へ。室戸、足摺の2つの岬を廻り、16札所を巡拝の旅へ
歩き遍路には遙かな道のりの修行の道場だ！！

23番(薬王寺)に参拝したあとは、およそ80Km かなたの室戸岬へと遍路の道をたどることになる。

★3回目に

○菩提の道場(伊予の国)「40番(観自在寺)～65番(三角寺)合計26ヶ寺(愛媛県)

旅も半ばを迎え、菩提の道場 伊予の国へ。札所間の距離が2番目に長い。

第43番明石寺から第44番大宝寺を打ち、第45番岩屋寺を終えると、いで湯の里 道後も近い！！

★4回目に

○涅槃の道場(讃岐の国)「66番(雲辺寺)～88番(大窪寺)合計23ヶ寺(香川県)

遍路ころがしの第66番札所雲辺寺を打てば 大師の誕生の地 善通寺をはじめ、町の中の札所が続く。
讃岐の平野にたたずむ霊場を巡れば、結願も近い。

備前西大寺地名考 金山の考察

日本先史古代研究会会員 丸谷憲二

1 はじめに

私が住む町は金山団地町内会である。団地の裏に金山と呼ばれる小さな丘陵がある。現在、金山の大半が岡山学芸館高校(岡山市東区西大寺上1丁目 19)の敷地になっている。この金山について考察した。

金山に関する論文は山陽新報に、明治41年3月9日、16日、23日の3回連載された沼田頼輔氏(1867-1934)の『金山の古今』のみである。沼田頼輔氏とは西大寺高校の前身、西大寺町立高等女学校の初代校長である。退官後、明治44年から山内侯爵家史編纂所主任となり、大正15年「日本紋章学」で学士院恩賜賞を受賞している。

2 金山の読み

金山の呼称に3種ある。「かなやま」「かねやま」「きんざん」である。「きんざん」とは「金を産出する鉱山」である。「かなやま」も「金属鉱石を掘り出す山。鉱山。近世の金銀銅山などの総称」と『大辞林』にある。

3 沼田頼輔著『金山の古今』の要点

3.1 貝塚の遺跡

金山の貝塚は余の発見に係りしも惜い哉、高等女学校の敷地に係り校舎建築のために、その遺殻を一掃せしが故に今はこれを知ることが得ず。ただ同校理科教室の背面築地の付近に僅に貝殻の散点せるを見るのみ。

3.2 縄文土器

当時余は其の遺跡中より縄文土器の一片を獲てこれを珍襲せしも、今はこれすら紛失して見るを得ず実に惜むべきなり。

3.3 古墳

この古墳も亦高等女学校の敷地に属し校舎建築の為に偶然発見せしものなれども往時既に何人かこれを発掘してその石廓は既に破壊せられ巨大なる天井石は運び去られて両側の石壁も亦既に全形を失ひその位置も著しく変りたれど埋葬せられたる葺瓦等の比較的完全のもの多かりしは不幸中の幸福なりき。…古墳のありし位置は第一号校舎一学年教室の東にありて眺望絶景なれば所詮謂「朝日さし夕日かがやくてふ」当時の理想的兆域にも適當する地形なるのみならず他に古墳の存在を認めざれば少なくともこの古墳の大化新制以前に係るものたるや疑なしとす。

3.4 八幡山城

『隠徳太平記』巻五十三に「如此て岡山の城には己れ遷り居て沼城には舎弟春家を置き、西大寺の八幡山には忠家を処てけり云々」…『隠徳太平記』に見えたる西大寺の八幡山といふはこの金山を云へること勿論にして同時に宇喜多氏の深謀熟慮あることを察すべし。

『隠徳太平記』は、戦国時代から安土桃山時代に及ぶ毛利氏の制覇を中心とした戦記である。原本は81巻42冊、毛利藩の支藩・岩国吉川家の老臣香川正矩が草稿を纏め、次男の景継が完成させた。完成

は元禄八年(1695)で刊行は正徳二年(1712)である。

下巻五十三を三好基之氏は『新釈隠徳太平記』に「浦上宗景並びに宇喜多直家の事」とし、「こうして、岡山の城には自分が移り、沼の城には舎弟春家を置き、西大寺の八幡山(同市西大寺金山)には忠家を置いた」と説明している。

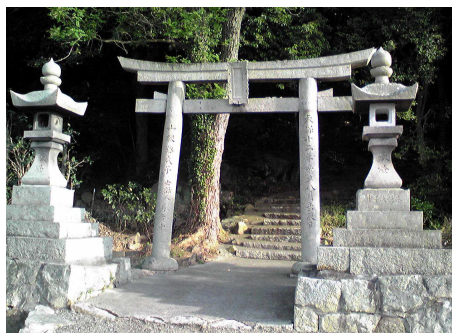
4 東山寺松寿院と金山八幡宮

金山八幡宮(岡山市東区西大寺上1-19-10)の通称名は金山様(カナヤマ)である。JR赤穂線西大寺駅から西へ約500m、氏子は岡山市浅越山根である。祭神は『西大寺町誌』には仲哀天皇、応神天皇の2神、『上道郡誌』には仲哀天皇、応神天皇、神功皇后の3神、岡山県神社庁は仲哀天皇、素盞鳴尊の2神としている。康保年間(964~968)に岩清水八幡宮(京都府八幡市八幡高坊30)を勧請。昭和22年12月22日火災。祭典は10月6日例祭、5月13日春祭、7月第2土曜日夏祭である。境内坪数2075坪。

『備前記』(1700~1717年成立)に、浅越村「村東ノ宮山ニ金山八幡宮、社領高五石、…村東ニ真言宗、富海山東山寺松寿院ト云寺アリ、寺中ニ加納院、寺領高十五石、本寺、高野山多門院、本尊観音、此寺地美景不レ斜」とある。『備陽記』(1721年成立)には「備前国奥上道郡 寺中一軒 加納院 浅越村之内高二拾石。私ニ曰上ノ高之内五石ハ同村…金山八幡宮社領祠官取来ル者也 延宝二(1674)二月朔日 御黒印 東山寺」とある。御黒印(黒印状)とは、戦国時代からの将軍・大名・旗本などが墨を用いて押印した上で発給した文書である。奥上道郡に注目したい。



金山八幡宮



富海山東山寺松寿院 墓地

5 金山八幡宮の前の祭神 兵主神

『西大寺町誌』の村社 金山八幡宮の説明に「『吉備前秘録』によると、最初兵主(ひょうず)を祀っていた」とある。備前国領国地誌である『吉備前秘録』の成立は1740~1748年であり著者不明である。『吉備前秘録』には「金山。兵師とも云ふ。中野村の北西大寺に近し。此山に八はたの宮あり。」と有り、校註(校訂した結果与えられる注釈)に「兵師は延喜式神名帳に見えたる兵主神社と同一のものなるべし。兵主は史記に見えたる兵主と同一のものにして蚩尤(しゅう)を祀りたる漢神ならんか。」とある。

兵主神(ひょうず)とは、『史記・封禅書』の「天主・地主・兵主・陽主・陰主・月主・日主・四時主」の八神の一とされる武神名である。『史記』(紀元前91年頃成立)は、前漢の武帝の時代に司馬遷によって編纂された中国の歴史書である。正史の第一に数えられる。二十四史のひとつである。封禅(ほうぜん)とは帝王が天と地に王の即位を知らせ、天下が太平であることを感謝する儀式である。『史記・封禅書』は、古代中国を理解するために不可欠な文献である。

22 封禪書 『史記・封禪書』中國哲學書電子化計劃

於是始皇遂東遊海上，行禮祠名山大川及八神，求僊人羨門之屬。八神將自古而有之，或曰太公以來作之。齊所以為齊，以天齊也。其祀絕莫知起時。八神：一曰天主，祠天齊。天齊淵水，居臨菑南郊山下者。二曰地主，祠泰山梁父。蓋天好陰，祠之必於高山之下，小山之上，命曰「時」；地貴陽，祭之必於澤中圜丘云。三曰兵主，祠蚩尤。蚩尤在東平陸監鄉，齊之西境也。四曰陰主，祠三山。五曰陽主，祠之罘。六曰月主，祠之萊山。皆在齊北，并勃海。七曰日主，祠成山。成山斗入海，最居齊東北隅，以迎日出云。八曰四時主，祠瑯邪。瑯邪在齊東方，蓋歲之所始。皆各用一牢具祠，而巫祝所損益，珪幣雜異焉。

『延喜式神名帳』には大和国城上郡の穴師兵主神社をはじめ 19 社(21 座)の兵主神社がみえる。兵主神社は但馬国(兵庫県北部)を中心に山陰道に集中している。天日槍(アメノヒボコ)を祀る出石神社(兵庫県豊岡市出石町宮内)を取り囲むように重要路に祀られている。

兵主神(ひょうず)は、黄帝と最後まで戦った諸侯とされ、漢の高祖も蚩尤(しゅう)を祀った。管仲の著書『管子』に、兵主神とは兵権を握る者、もしくは軍の指揮官を意味しており、中国における兵主神は軍神・武神の性格を有する神であった。蚩尤(しゅう)とは三皇五帝のうちの一人、炎帝神農氏の子孫とされている。兵器の発明者とされ霧をあやつる力があつた。岡山市内では県道 74 号倉敷飽浦線「阿津東」バス停前に兵主神社(岡山市南区阿津 2783)がある。天皇山鎮座、祭神は素盞鳴命である。

5.1 弓月と兵主神

内藤湖南氏(京都帝国大学教授・東洋史)は、「奈良県三輪山傍の穴師の弓月嶽にある大兵主神社(奈良県桜井市穴師)は『史記封禪書』に、秦の始皇帝が山東地方で祀っていた「天主(天の神)、地主(地の神)、兵主(武器の神)、陰主(陰を知る神)、陽主(陽を知る神)、月主(月の神)、日主(太陽の神)、四時主(四季の神)」の八神のうち根本尾神である兵主神を祀る神社だから秦氏の祖の弓月君と結びつく」としている。兵主神は秦氏によって日本に持ち込まれた。

5.2 秦氏の故郷、弓月国

秦氏の故郷・弓月国(クンユエ)は、中央アジアのカザフスタン内にあり、東の一部がシンチャンウイグル自治区にかかっている。天山山脈のすぐ北側に位置し、南にはキルギスタンが接している。昔、この地は、クルジア(Kuldja・弓月城)と呼ばれていた。

6 金鉱床指示植物

「正しい金鉱の探し方」が注目されている。1981 年、鹿児島県北部で「発見」された菱刈金鉱床は世界有数の超高品位金鉱床で、鉱床の鉱石は1トンあたり約 50 グラムの金を含有している。鉱床全体で 260 トンの金を埋蔵し、そのうち約 100 トンの金を産出している。これを発見した金属鉱業事業団(石油天然ガス金属鉱物資源機構 JOGMEC)では 1987 年から植物を用いた「植物地化学探査」を行っている。植物地化学探査では「ヤブムラサキ」が金鉱床指示植物として有効と報告している。「葉の部分に多くの金を含有する。」



■4%の金を含む超高品位金鉱石

ヤブムラサキ

『土壌分析』よりも広範囲に金鉱脈の存在を窺い知ることが容易である。ヤブムラサキは岡山県内に広く分布自生している。ヤブムラサキはクマツヅラ科の落葉低木。高さ約 2 メートル。葉は卵形または長楕円形で長さ 6～12cm、先はとがり、縁に鋸歯がある。表面に軟毛、裏面に星状毛を密生し、ピロード状の手ざわりがする。平成 22 年 5 月 27 日に十川氏(操山公園里山センター)に御案内いただき、操山に自生している「ヤブムラサキ」の葉を採取した。熊山でも採取している。

7 金山探索

たけちやすし

武智泰史氏(倉敷市立自然史博物館)は「江戸時代の文献における金山は、金山と銅山がある。」と教示される。金山が金山なのか、銅山なのかを自生植物により確認したい。

平成 22 年 6 月 6 日に「金山」の頂上付近の自生植物を撮影した。「オニヤブソテツ」が自生していた。



オニヤブソテツ 包膜は灰色で中心部は黒色

7.1 金山草

金鉱床指示植物は金山草と呼称されている。甲斐黄金村・湯之奥金山博物館(山梨県南巨摩郡身延町上之平 1787 番)に注目したい。「湯之奥金山」は、古くから「信玄の隠し金山」として知られていた。谷ロー夫氏の『武田軍団を支えた甲州金・湯之奥金山』に「中山金山の露天掘り跡」として、「中山の尾根ホウロク沢に残された露天掘り跡の一つ、金山草が群生している。風化鉱石の金は品位が高い。」「金のありかを教える金山草」として「オニシダを金山草ともよぶ。金のあるところを好み群生する。」とある。古代には植生を持って金属鉱床の有無を判断していたようである。

7.2 オシダ「オニヤブソテツ」

魔除けのシダ、「オニヤブソテツ」はオシダ科のシダ植物である。房総半島や、伊豆、紀伊半島などの海沿いの岸壁に多くみられる。魔除けの植物として有名なのは、ヒイラギ、ナンテン、ヒイラギナンテン、ナナカマドである。『武田軍団を支えた甲州金・湯之奥金山』に「オシダを金山草ともよぶ。金のあるところを好み群生する。」とある。オニヤブソテツが「金山草」であるという情報は他には無い。

8 浅越庄の中世史

浅越庄(アサゴエ)の初見は仁安二年(1167)である。

本家・領家は高山寺領(京都市右京区梅ヶ畑尾尾町 8・本家職)・天竜寺領(京都市右京区嵯峨天竜寺芒ノ馬場町 68・金剛院領、領家職)・長講堂領(京都市下京区本塩竈町)・皇室領・金岡東庄成光寺領。出典は陽明文庫所蔵兵範記裏文書、京都御所東山御文庫記録、高山寺古文書、鹿王院(京都府京都市右京区嵯峨北堀町 24)文書、備陽記引古文書、西大寺文書、塚本文書 遺文番号 へ 4840、へ 4841、へ 4842 永徳 3(1383)仁和寺宮置文に高山寺領＝永享 7(1435)義教、天竜寺金剛院に寄進(領家職)。

本家とは日本の荘園制における土地支配構造上、最上位に位置づけられる土地の名義上の所有者である。領家とは荘園を開発した開発領主から寄進を受けた荘園領主である。浅越庄は中央の有力寺社が荘園寄進を受けて領家となっていた。

9 まとめ

通称名の金山様が重要である。金山の山頂近くに金山草「オニヤブソテツ」が自生しており、金鉱床指示植物から金山と推定される。中国ではアルタイを「金山」と表記している。「金山」と表記されるアルタイ山脈は、金、鉄をはじめとする鉱物資源が豊富なことで知られている。金山古墳の埋葬者は秦氏の故郷からの渡来人であろう。

10 謝辞

「金山八幡宮」について、平成 24 年 5 月 3 日に天神八王子月尾宮(岡山市東区西庄 173)の松嶋章雄宮司にご教示戴いた。昭和 58 年より高畠孝知宮司の後任として宮司職を兼務されている。「岡山学芸館高校の体育館の処に金山八幡宮の立派な本殿があった」とのことである。「鉱物資源探査技術開発調査 レアメタル賦存状況調査報告書」については、中西真理子氏(独立行政法人 石油天然ガス・金属鉱物資源機構 金属資源情報センター)にご教示戴いた。

11 参考文献

- ①『金山の古今』沼田頼輔 山陽新報 明治 41 年 3 月 9 日、16 日、23 日
- ②『備前西大寺古文書』昭和 22 年 吉備文化研究会
- ③フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』
- ④『西大寺町誌』西大寺町誌編集委員会 1971 年 西大寺町誌刊行会
- ⑤『上道郡誌』大正 11 年 上道郡教育会
- ⑥『備前記全』平成 5 年 就実女子大学近世文書解読研究部 備作史料研究会
- ⑦『備陽記』昭和 40 年 石丸定良 日本文教出版(株)
- ⑧『吉備前秘録』『吉備群書集成』昭和 45 年 歴史図書社

- ⑨『日本荘園データ2』国立歴史民俗博物館 博物館資料調査報告書-6 1995
- ⑩『日本歴史地名体系 34 岡山県の地名』1998 平凡社
- ⑪『新釈 陰徳太平記』三好基之編著 平成2年 山陽新聞社
- ⑫『史記封禪書』 <http://blog.livedoor.jp/xuetui/archives/2299925.html>
- ⑬『史記 中國哲學書電子化計劃』<http://ctext.org/shiji/zh>
- ⑭『大兵主神社』 <http://www.d3.dion.ne.jp/~stan/txt0/n2hyz2.htm>
- ⑮『神道史大辞典』2004年 吉川弘文館
- ⑯『日本神名辞典』平成13年 神社新報社
- ⑰『吉備国の語源 黄蘗と羈縻(きび)政策 熊山遺跡出土品の考察』丸谷憲二
- ⑱『秦氏と弓月国の考察』丸谷憲二
- ⑲「重金属と植物」本浄高治『週刊朝日百科 植物の世界』1976 朝日新聞社
- ⑳『オニヤブソテツ』http://hananouta.nomaki.jp/page_thumb123.html
- 21『史記・封禪書』中國哲學書電子化計劃 <http://ctext.org/shiji/feng-chan-shu/zh>
- 22『インターネット博物館』<http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/MINE2001/index.html>
- 23 独立行政法人 石油天然ガス・金属鉱物資源機構 金属資源情報センター
『鉱物資源探査技術開発調査レアメタル賦存状況調査報告書(浮遊微量金属探査技術開発)・浮遊微量金属探査技術開発調査報告書』
昭和60年度 レアメタル賦存状況調査報告書(浮遊微量金属探査技術開発)
昭和61年度 レアメタル賦存状況調査報告書(浮遊微量金属探査技術開発)
昭和62年度 レアメタル賦存状況調査報告書(浮遊微量金属探査技術開発)
昭和63年度 レアメタル賦存状況調査報告書(浮遊微量金属探査技術開発)
平成元年度 レアメタル賦存状況調査報告書(浮遊微量金属探査技術開発)
平成2年度 レアメタル賦存状況調査報告書(浮遊微量金属探査技術開発)
平成3年度 レアメタル賦存状況調査報告書(浮遊微量金属探査技術開発)
平成4年度 レアメタル賦存状況調査報告書(浮遊微量金属探査技術開発)
平成5年度 鉱物資源探査技術開発調査報告書(浮遊微量金属探査技術開発)
- 24 『武田軍団を支えた甲州金・湯之奥金山』谷口一夫 2007年 新泉社
- 25 『甲斐黄金村・湯之奥金山博物館』<http://www.town.minobu.lg.jp/kinzan/index.html>

当会のホームページを開設

<http://www.hasukura.com/sensikodai.htm>

編集責任者 = 丸谷憲二副会長(掲載内容の検証と総括判断)

運用実務者 = 濱手英之編集委員(主に丸谷氏の指示で掲載運用)

事務局担当 = 山崎泰二事務局長(外部折衝と内部調整)

当面は濱手会員の好意で彼の持ちスペースを借用し、最小の経費でスタートします。

皆様のH/Pへの投稿もお願いします。連携できる他団体の紹介もお願いします。

古事記編纂1300年を思う

-----出雲路の探訪記-----

日本先史古代研究会会員 濱手英之

古事記編纂1300年を迎えた平成24年は主にゆかりのある各地で様々な催しが開催される。現存する歴史書で日本最古といわれる古事記についてのイベントが多く行われるということで、歴史好きの私は楽しみであり、この機会にもっと歴史を学び直そうと、わくわくしている。

古事記にゆかりの地は多くある。ざっとあげても島根、宮崎、淡路、高志、吉備等古代の人たちの活動範囲の広さに感動する。その中でも出雲は国譲りの件もあり、特に上巻では半分近くが出雲の話ではないだろうか。記録に残る古代日本の代表といっても良い場所といえるかもしれない。

そんなこともあり、先日出雲に出かけたとき、島根半島の日本海側に行ってみた。初めて訪れたのであるが、自然が良く残り、大変美しいところであった。美保関灯台や美保神社の方を周ってから日本海側に出て西に向かった。美保関灯台からは何とか隠岐の島が、見えたような見えないような感じ。再チャレンジするか、実際に隠岐島には行ってみたいものだ。天気が良ければ50kmほど離れた島もよく見えるらしい。近くには恵比寿様が釣りをしたという小島もみえ、海の色のもっと美しい特筆ものである。島根半島は、東と西、また北と南で隆起、沈降のしかたが違いうらしいが、北面はリアス式海岸が続き特に美しい。

出雲国風土記の国引き神話でも各国から余った土地を引いてきたそうだが、地質的にも三つのプレートで構成されていると地元の方に伺った。

そのまま西に向かい島根原発の敷地内？を通る県道37号線？も通過した。島根原発と県道は柵で遮られてはいるが、沢山の監視カメラがあり、なんだかいやな感じだ。きれいな施設で、清潔感があるのは良い。手持ちの線量計も問題があるほどは反応しなかった。一つ気になったのは、地層である。水平に近い地層もたくさん見受けられるが、明らかに傾いた地層も何か所かある。20度前後は傾いているようだ。地層が場所によって傾きが違うのである。どうやらプレートのぶつかりあう境界ということらしい。いつの時代に、なぜ、どうして、どうなって何回でこうなったかは知らないが、大きな地殻変動がないことを祈る。

そして、佐太神社に初めて参拝する。こちらは延喜式の出雲の国の二宮と称され、出雲三大社の一つである。正殿、北殿、南殿に12柱の神が祭られている。美しい社殿である。こちらの伝承には中世にイザナギノミコトの陵墓を遷したとあるらしい。古事記等によれば、「イザナミノミコトは出雲国と伯伎国(伯耆国)との堺との比婆山に葬りき」となっている。そして、伝承によると、中世に比婆山の神陵をこちらに遷し祭ったと伝え、旧暦10月には母神であるイザナミをしのんで八百万の神々がここにお集まりになったらしい。

ということで、神社裏の小道をしばらく上り、磐座にお参りすることができた。国を生んだ神の陵墓は大きなものではなかったが、大変うれしい経験であった。是非これを期に子宝に恵まれないものである。古代の方達の思いを想像しながら帰途についた。

編集後記

- 平成 24 年度の定期総会は若狭会長の旧知の岡山蓮昌寺庫裏で開催しました。岡山市内一番の喧騒地田町でありながら、境内は静かです。
基調講演は矢吹壽年（元岡山市教育委員会勤務）会員にお願いしました。400 字原稿用紙で約 45 枚にのぼる、長年の研究成果を発表されました。本号では 2 回に分けて掲載します。力作です熟読下さい。
- 今回は広島の前田忠興氏と濱手英之氏に初めての投稿を戴きました。濱手氏は今年から取り組むホームページを担当していただきます。
- 昨年の当会の探訪会は岡山笠岡の沖に浮かぶ高島にて行いました。当地の会員である藪田・河田氏は高齢にもかかわらず、古代史に対する熱意が深く藪田氏からは何度かお便りを戴きました。編集委員の皆さんも感動され、是非本稿に掲載をとの声上がり、掲載させていただきました。
“きび考” 3 号に「古代土器製塩」として寄稿いただいた広島の松浦宣秀会員が、古代製塩で「村おこし」をなさっている様子がNHKで放映され、元気な姿を拝見しました。益々の活躍を念じています。延原勝志副会長は備前市文化財保護委員に就任されました。活躍を期待しています。
- 当会のH/Pを公開しました。本年度の主要な活動方針の一つですが、丸谷副会長を中心に運用を計って参ります。濱手会員の好意に感謝し、会員の皆様からの投稿・寄稿を歓迎いたします。35 ページに掲載していますので早速開いてみてください。ご意見・提案は事務局宛にお願いします。この“きび考”も毎号全て載せています。写真はカラーですから迫力があります。お楽しみに。
- “きび考”の執筆者は学者などの発表なざる「論文」ではありません。論旨が諸先生の既に発表なさっていることに類似する場合もあるでしょう。学会などで定説化されている場合等を含めて、各々の執筆者の言葉で表現するように心がけています。同じ字句を引用する場合には出典を明示することにしています。必ずしも「先史」にこだわりません。紀行文・エッセイ等会員の皆様の寄稿をお待ちしています。

編者

“きび”考 第 6 号 2012(平成 24)年 7 月 31 日発行

発 行 日本先史古代研究会
会長 若狭哲六 706-0022 岡山県備前市東片上 771
事務局 702-8002 岡山県岡山市中区桑野 504-1 山崎泰二方
電話=086-276-6654 FAX=086-276-2241
メール=senshi@bosaisystem.co.jp(事務局専用)
編集委員 井上秀男 延原勝志 樋口俊介 本松一郎 丸谷憲二
濱手英之 山崎泰二(事務局長兼編集委員長)